
IS（インフィニット・ストラトス）～空を愛する蒼剣～

天照大神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS（空を愛する蒼剣）

【Nコード】

N0414R

【作者名】

天照大神

【あらすじ】

女性にのみ操縦することのできる兵器、

インフィニット・ストラトス

IS・・・

その常識は2人の「男」によって覆され、2人の名は世界中に伝わってしまう・・・

物語の行方はどうなるのか・・・？

プロローグ（前書き）

どうも、天照大神です！！

数人の他作者に影響されて・・・

とうとうやってしまいました！！

ISの二次創作です！！

私の3作品目になりますがどうぞ宜しくお願いします！！！！

では・・・どうぞ！！

プロローグ

IS、正式名称「インフィニット・ストラトス」

世界中に存在するいかなる兵器よりも劣らない「究極の機動兵器」

ある1人の学者によって発表され、そのすぐ後に起きた「ある事件」を境に急速に世界に広がっていった……

ISを動かせるのは「女性」のみ、兵器として使われ始めたISは世界各国の抑止力となりそれを維持するため「女尊男否」の社会が当然となりつつあった……

しかし、どんな事にもイレギュラーは生じるものである

それは如何にISであろうと変わる事は無かった……

・
・

? side

? 「此処は何処だ………?」

俺は受験先の高校の試験会場を目指していたが会場内で迷子になっていた

? 「それもこれも………なんで「複数の高校の試験を1つの建物」で行うんだか………」

俺が今いる建物では、様々な高校の試験会場が設置されており、俺が受験しようとしていた高校もその中の1つだったからだ

? 「はあ．．．．．」

俺は建物の中をたださまよっていた

? ． ． ． ? 「不幸だ．．．．．ん？」

つきあたりを左に曲がると同年代の男子が俺と同じセリフを呟いていた

? ? 「．．．．．」

? 「．．．．．」

？・？・？「同志よ！！！」

俺達は互いに握手してそんなセリフを言っていた

？？「俺も会場が分からなくてさ……………途方にくれていたんだよ」

？「俺もだ、全く……………なんで会場を纏めたんだか……………」

俺達は並んで建物の中を進んでいた

？？「俺は織斑一夏、お前は？」

？「俺か？俺の名前は御剣蒼也、蒼也でいいぞ」

一夏「分かった、俺も一夏でいいからな」

蒼也「ああ」

そして俺達の進んだ先には1つの扉があった

一夏「行き止まりか……？」

蒼也「あの扉以外は、進む事は出来ないしな」

一夏「どうする、蒼也？」

蒼也「開けてみるか………何か手掛かりがあるかもしれない」

一夏「手がかり？」

蒼也「この建物の地図とか……な」

一夏「なるほど……じゃあ、行こうぜ」

蒼也「ああ」

俺と一夏は扉の前まで歩き、扉を開ける

蒼也・一夏「これは………？」

扉の先は真つ暗で天井の高い部屋の中心にロボットスーツらしきものが2機、天井からライトアップされていた

一夏「なんだ・・・・・・・・これ？」

蒼也「・・・・・・・・IS、だ」

一夏「IS・・・・・・・・これが」

俺は向かって右の、一夏は左のISに自然と手を伸ばしていた
少し触れた瞬間にISの装甲が光り出す

？「君達！？此处でなに・・・・・・・・を！？」

？？「そんな！？ISが、動いている！？」

後ろの扉から2つの女性の声が聞こえる

？」「こうなったら・・・君達、私達についてきてくれるかしら？」

？？「事情はそこで聞きます。いいですね？」

蒼也・一夏「はい・・・。」

俺達はそのまま、その2人について行った・・・

それから数カ月後

つきは4月、俺は1つの学園の前に立っていた

蒼也「此処が……」「IS学園」

俺は学園の敷地の広さに唖然としていた

蒼也「此処が俺が通う学校か……進路が変わったけど、
楽しくやれるよな……一夏もいるし……」

蒼也 side out

プロローグ（後書き）

ちなみに蒼也のヒロインは2人程決まっております

一夏も2人は決まっているんです

1人をどうするかを悩んでいます・・・

では、次回をお楽しみに！！

主人公設定（前書き）

此処には蒼也の設定が書かれています

作品が進むたびに更新していくので新しく来られる方の中にはネタバレになるかと思えます

そうなるのはずいぶん先ですが（汗）

主人公設定

・御剣 蒼也 （みつるぎ そうや）

15歳 男

世界で一夏以外にISを動かせる男。しかし、一夏同様ISの操縦は初心者並み

一夏とは受験日のあれで親友の関係である

かなり頭がよく、本来受験するはずだった高校も県トップクラスの高校だった

「瞬間記憶能力」持ちであり、スポーツ万能である。しかし、スポーツに関しては自身は人並みと言い張っている

IS設定

・フリーダム

一夏の白式同様、蒼也の為に作られた機体

見た目はまんまガンダムSEEDのフリーダムガンダム

- 初期設定時

背中にスラスターは付いているが翼の形では無い、武器は右手のビームライフルと左手のシールドだけである

武装

・ルプス・ビームライフル

・シールド

ファースト・シフト
- 一次移行時

背中にフリーダムのスラスターが付き、腰にレール砲とISのシールドエネルギーを消費して形にするビームサーベルが2個使えるようになる

武装

・ラケルタ・ビームサーベル×2

- ・バラエーナ・プラズマ収束ビーム砲×2
- ・クスイフィアス・レール砲×2
- ・ルプス・ビームライフル
- ・シールド

第1話 IS学園（前書き）

どうも天照大神です！！

原作小説を6巻全てまとめ買いしてきました！！

これで普通のペースで更新していくことが出来ると思います！！

では、第1話どうぞ！！

第1話 IS学園

蒼也 side

蒼也（不味い……この空間は非常に不味い……）

俺は入学時に貰った資料に書いてあった教室に付き、指定されていた通りの席に着席していた

しかし、ISはもともと女性にしか動かせない。そしてそれを学ばせるための学園である此処のクラスは必然的に

蒼也（俺と一夏以外全員女子……心が休まらんぞ……）

せめて一夏の隣だったら、とため息を吐く蒼也

一夏の席は一番前であり、俺は真ん中あたりである

周り8個の席全が女子……正直辛い

？「・・・君、織斑一夏君！」

一夏「は、はい!!」

自席で考え込んでいた一夏を大声で呼んでいる女性、その声に反応する一夏

女性はこのクラスの「副担任」、山田真耶先生である

真耶「ご、ごめんなさい大声だして。怒ってるよね？そうだよね！
？自己紹介を『あ』から始めてて今、織斑君の『お』になったから
読んだんだけど、自己紹介してくれるかな？だ、駄目かな？」

山田先生はぺこぺこ頭を下げながら一夏にお願いしていた

その際にサイズがあつてなさそうな眼鏡が落ちそうになっていた

一夏「いや、そんなに謝らなくても……ちゃんと自己紹介しますから、先生落ち着いて下さい」

真耶「ほ、本当！？本当ですか！？本当ですね！？や、約束ですよ！？絶対ですよ！？」

山田先生は一夏の手をとって熱心に詰め寄っていた

蒼也（一夏のも大変だな）

一夏は先生が手を離すと、立って後ろに振り向く

一夏「えー……えつと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏は儀礼的に頭を下げて、上げた。そしてそれだけ言って席に座ってしまった

蒼也（おいおい！？なんだよこの空気！？女子の方から『もつといろいろ喋ってよ』とか『もう終わりなの！？』って視線が一夏に向けられてるぞ！）

そんな感じで自己紹介は続いて行く

真耶「じゃ、じゃあ次は御剣君ですね！お願いしますー！！」

山田先生に言われ、今度は俺が立つ

蒼也「えっと……御剣蒼也です。その……そんな特徴ないですけど、よろしくお願いします」

俺はそう言って座ってしまう

蒼也（つか他に何を言えと！？）

俺は一夏の時と同様の女子の視線をきにしつつ思っていた

そして全員の自己紹介が終わると同時に、前の扉から教室に1人の女性が入ってくる

蒼也（誰だ……？もしかして、このクラスの担任？）

一夏「ち、千冬姉？」

「パンツッ！！」

一夏が言つと同時に女性は持っていた出席簿で一夏の頭を叩いた

一夏はそれを喰らい机に沈む

？「学校では「織斑先生」だ、馬鹿者め」

その女性は教卓の前まで歩いていき、教室にいる生徒を見渡す

？「諸君、私が織斑千冬だ。新人の君たちを1年で使い物の操縦者になるように育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聴き、よく理解するように。出来ない者には出来るまで指導してやる」

織斑先生が言いきつてから数秒間、教室内は鎮まる

しかし、

「キャーーーー！！！！千冬様、本物の千冬様よ！！」

「ずっとファンでした！！！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！！北九州から！！」

「わ、私は北海道の端っこからです！！」

いや、北九州も北海道の端っこも変わらないだろ。と俺は内心で思う

「あの千冬様にご指導させていただけるなんて嬉しいです!!」

「私、お姉さまのためなら例え火の中水の中!! 何処までもお伴します!!」

「甘いわよ!! 私はお姉さまのためなら死んだって構わないわ!!」

おい、後ろの2人はいくらなんでもおかしいだろ……

一夏「いてて……」

と、そこで出席簿によってダウンしていた一夏が復活する

一夏「ってなんでこんな騒いでるんだ? 千冬姉……」

パンツ!!

千冬「織斑先生だ」

一夏「は、はい……織斑先生」

千冬「全く……織斑といい、このクラスの女子といい……
なんで私が受け持つクラスに馬鹿が集約するんだ？」

真耶「さ、さあ……？」

とまあ、一夏と織斑先生のやり取りを聞いていた数人の女子からあ
る言葉が発せられる

「え……？織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「いいなあ……変わって欲しいなあ……」

千冬「さて、さっそく授業を始める！！教科書を出せ！！」

織斑先生の一言で教室が静まり、授業が始まった

蒼也「はああ……………」

先程の授業が終了し、今は休み時間

一夏と話そうとしたがポニーテールの1人の女子が一夏を連れて何処かに行ってしまったのだ

蒼也（早く…………早く戻ってきてくれ一夏ああああああ！

!!!!
)

俺は心の中で一夏の名前を叫んでいた………

蒼也・一夏「はあ………」

2時間目終了後の休み時間、やっと一夏と話す事が出来たがお互いにため息を吐いていた

？「ちょっとよろしくて？」

一夏「へ？」

蒼也「ん？」

話しかけてきたのは金髪が鮮やかな女子だった

？「わたくしに話しかけられてそんな態度・・・・・・・・もっと相応の態度というものは出来ないんですか？」

そう言われ、俺と一夏は互いに同じ事を思う

蒼也・一夏（苦手だ・・・・・・・・こういう手合いの奴は・・・・・・・・）

？「わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ

「!!」

一夏「代表候補生ってなんだ？」

一夏の言葉にかたまるセシリア

セシリア「あ、あなた本気で言っていますの!？」

蒼也「ああ……一夏、参考書捨ててたんだっけ……読んでないなら仕方ないな」

一夏「ああ……って訳だ。ごめんな」

セシリア「ま、まあいいですわ!! ISの操縦の仕方が分からなかったら是非! どうしてもって言うのでしたらわたくしが直々に教えて差し上げますわ!! 入試の際に唯一教官を倒したこの私が!!」

蒼也・一夏「教官？俺たちも倒したぞ」

今度は2人の言葉に教室の時間が止まった

セシリア「そ、そんな！？わ、わたくしだけと聞きましたが！？」

一夏「女子ではってオチじゃないのか？」

蒼也「はつきり倒したとは俺達だと言えないけどな……………」

セシリア「そ、そんな……………わたくしだけでは無いと！？そんな事が……………」

セシリアは2人の言葉に慌て始める

蒼也「オ、オルコットさん。とりあえず落ち着いて」

セシリア「これが落ち着いていられ・・・・・・・・・・」

・キーンコーンカーンコーン

蒼也「あ、本鈴だ」

セシリア「くっ・・・・・・・・また後で来ますわ！！逃げない事ね！！」

セシリアはそう言って自席に座った

千冬「それでは、授業を始める。この時間ではっと、その前に決めておくことがあったな」

織斑先生がふと思い出したように話を変え始めた

なんだ？

千冬「再来週行われるクラス対抗戦にでる代表を1人決めなければな」

一夏「対抗戦・・・？」

千冬「そうだ、クラスの代表であり対抗戦だけではなく生徒会が開く会議や委員会への出席・・・まあ、対抗戦以外は普通の学校と変わらん」

「はいはい！！織斑君を推薦します！！」

一夏「は！？」

「私もそれがいいと思います！！」

一夏「お、俺!？」

千冬「では、候補者は織斑一夏。他にいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「じゃあ、御剣君を推薦します!!」

「私も私もー!!」

蒼也「俺もか……」

千冬「では、多数決で決めよう。まずは……」

セシリア「待って下さい!!納得がいきませんわ!!」

セシリアが立ちあがって俺と一夏を見る

セシリア「男がクラス代表なんて……代表候補生のわたくしに1年間そんな屈辱を味わえと!？」

織斑先生を始め、クラスの全員がセシリアの発言に耳をかたむけている

セシリア「実力が1番の方が代表になるのは当然の事!!こんな島国で、文化的にも後進している国の男になんて任せられるはずが -
- - - -」

一夏「じゃあ、戦うか？」

セシリア「!？」

一夏が立ちあがってセシリアを見ていた

それに合わせて俺も立ちあがる

一夏「ISの試合で勝った方がクラス代表。それでいいか？」

蒼也「俺は一夏の意見に賛成だ。どうする、オルコットさん？」

セシリア「いいですわ！！ただし、わざと負けるような事をしましたらわたくしの奴隷になってもらいますわよ？」

蒼也「上等だ。……そうだ一夏、あれはどうする？」

一夏「そうだな……ハンデはどうする？」

セシリア「さっそくお願いですの？」

蒼也「いいや……」「俺達がどの位つけるのか」って事だ」

セシリア「っ……いい度胸ですわ、そしてハンデ？笑わせてくれますわね！？」

千冬「軽々しく大口をたたくな、馬鹿どもめ」

蒼也・一夏「いてっ！？」

出席簿でたたかれ、頭を押さえる俺と一夏

千冬「では、勝負は一週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。織斑、御剣、オルコットはそれぞれ準備しておくように。では、授業を始める！！！」

そして、クラス全員は授業に集中し始めた

蒼也 side out

第2話 クラス代表決定戦！！（前書き）

どうも天照大神です

更新が遅れてすみませんでした

では、第2話をどうぞ！！

第2話 クラス代表決定戦！！

蒼也・side

↓放課後↓

一夏「はあ……………」

蒼也「おい、大丈夫か一夏？」

一夏「あ、ああ……………」

俺と一夏は放課後の教室にのこっていたが一夏はぐったりとうなだれていた

一夏「専門用語が多すぎる……………ついていけん」

蒼也「悪く言えばお前の自業自得だけだな・・・・・・・・」

一夏「うぐっ・・・・・・・・」

反論できない一夏は頭を机に突っ伏せる

蒼也「此处にいても疲れはとれないな・・・・・・・・」

俺達が今日の感想をいうなら「地獄」だった

クラスには他学年・他クラスから女子が押し掛け小声で話し、昼休みに昼食を食べに学食へ移動すると全員が大名行列のようについてくいる

そんな初日だったのだ

真耶「ああ、御剣君に織斑君。まだ教室にいたんですね、良かったです」

一夏「はい？」

一夏と俺は呼ばれた方向をみると山田先生が書類を片手に持って立っていた

真耶「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

蒼也「部屋ですか？確か1週間程は自宅からの登校と聞いていたんですが」

一夏「俺もそう聞いていたんですが」

真耶「そのですね……事情が事情なので部屋割りを無理やり変更したんですよ」

そーなのかーと俺と一夏は心の中でうなづく

真耶「政府特命という事もあったので寮に入れるのを最優先したみたいなんです」

一夏「でも・・・荷物が無いんで一度家に帰りますよ?」

千冬「その必要は無い、私が手配しておいた」

俺と一夏は声がした方向を向いた

そこには織斑先生が立っていた

千冬「生活必需品と・・・携帯電話の充電器があればいいだろう?」

一夏「どうもありがとうございます・・・」

蒼也「すみません、ありがとうございます」

真耶「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の1年生用食堂で取ってください。各部屋にシャワーがあつて大浴場も他の場所にあるんですが……2人は今は使えません」

一夏「え？何ですか？」

一夏、その質問は可笑いぞ

千冬「アホかお前は。同年代の女子と一緒に入りたいのか？」

一夏「あー……すみません、そうでした」

千冬「私達はこれから会議なのでな、山田先生」

真耶「はい、これがお二人のルームキーです。道草しないで寮に帰ってくださいね」

そいつって俺と一夏にルームキーを渡し、2人は教室から出ていった

一夏「俺は1025室だな」

蒼也「俺は隣だろうな、1026室だ」

俺達は帰りの準備を終え、席を立って教室から退散した

蒼也「じゃあな一夏、また後で」

一夏「おう」

俺と一夏は寮の部屋まで来て、お互いの部屋の前で別れた

蒼也「へー、綺麗だな」

目に入ったのは大きめなベット1つだった

俺は直ぐにベッドに腰掛ける

その時だった

ズドン！！

蒼也「なんだ！？」

外からそんな音が聞こえ、ドアを開けて周りを見る

すると横の部屋のドアに一夏が背中合わせにしゃがんでいた

蒼也「一夏？どうしたんだ！？」

すると他の部屋から女子生徒がぞろぞろと出てきた

一夏「蒼也！！訳は後で話す！！箒、箒さん。頼みますから部屋に入れてください。というか謝りますので。頼みます！！」

そして数秒後

箒「……………入れ」

ドアを開けた箒を見て一夏は部屋に入っっていた

さて

蒼也「俺も部屋に……………」

「え！？御剣君の部屋はそこなの！？」

「ほんとー！？ねえねえ、はいつてもいいかな！？」

「わたしもわたしもー！！」

蒼也（頼む、お願いだから服をしっかりときてくれよ……………）

女子生徒達の恰好はラフなルームウェアばっかだったのを見た蒼也はとても気まずかったようだった

そして時は進み代表決定戦の日

「夏」・・・・・・・・・・

蒼也「・・・・・・・・・・」

第「・・・・・・・・・・」

俺達は第3アリーナのAピットで待機していたんだが……

蒼也「篠ノさん、おれは一夏にISの事を教えるって聞いてたんだが……」

第「うつ……」

蒼也「1週間剣道だけって一夏、負けるぞ」

第「し、仕方ないだろう!!こいつは自分のISがなかったのだから!!」

そう言われると俺も何も言えない

真耶「お、織斑君織斑君織斑君!!」

蒼也「山田先生、どうしたですか？」

真耶「あ、御剣君もいたんですか。お2人の専用ISが届いたんですよー!」

千冬「織斑、すぐに準備しろ。まずはお前からオルコットと対戦してもらおう」

一夏「え？はい？」

「この程度の障害、男子たるもの乗り越えてみせろ。一夏」

一夏「お、おうー!」

一夏はそう言ってピットの搬入口の前に立つ
搬入口が開き、中のが見えた。そこには

『白』が存在していた

一夏がIS、「白式」を身に纏ってオルコットさんと戦い始めた

その間に俺も自分のISの準備を山田先生と一緒に始めていた

真耶「御剣君のISは織斑君の白式よりもフォーマットとフィッティングに時間がかかるそうなんです。だから織斑君に先に戦ってもらってるんです」

搬入口に別のコンテナが届き、箱が開いていく

そこにはどこか俺を待っていたかのように待機している機体があった

真耶「御剣君の専用IS、『フリーダム』です！さ、早く準備しますよー！！」

蒼也「はいー！！」

しかし、俺が始めた瞬間

『試合終了。勝者

セシリア・オルコット』

試合開始からおよそ30分、一夏の敗北がピット内に聞こえた

第「一夏……………」

蒼也「あの馬鹿者め…………武器の特性を理解しないからだ」

蒼也（一夏…………）

そして、ピットに一夏が帰ってきた

一夏「なんで俺は負けたんだ？」

千冬「武器の特性に気づかないからだ、馬鹿者め」

一夏「うつ…………」

千冬「山田先生、そちらは終わりそうか？」

真耶「だ、駄目です。オルコットさんの整備が終わってもまだかかります」

千冬「そうか、御剣。お前も試合中にISに慣れる。いいな？」

蒼也「はい……………」

そしてオルコットさんの準備が終わり、俺も現段階の調整でISに乗る

一夏「がんばれよ蒼也」

蒼也「ああ」

そして、俺はアリーナ内に向かっていった

セシリア「あら？あなたも逃げませんでしたのね」

蒼也「まあな、それに逃げたら男の恥だしな」

セシリア「先程の方のように……このわたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で踊りなさい！！」

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初段エネルギー装填

蒼也（これがISの戦闘……さっきの試合、忙しくてみてね

えから武器が全く分からん)

そう思っている間にセシリアの「スターライトmk?」から閃光が放たれ俺を撃ち抜く

蒼也「うわ!？」

俺は何とか避けるが肩にかすってしまう

セシリア「避けた?この私の攻撃を？」

蒼也「いやいや、かすったぞ」

セシリア「そんなもの当たったうちに入りませんわ!!この!!」

そして、先程と同じ攻撃を連射するセシリア

蒼也「ちょー！？うわっ！？」

どれも直撃はしないがIのシールドエネルギーはどんどん減っている

シールドエネルギー残量、503

蒼也「俺も攻撃しないとな」

そういつて俺は右手のルプス・ビームライフルでオルコットさんに向かって撃つ

セシリア「当たりませんわー！！」

しかし、簡単に避けられ俺は再び閃光の嵐に襲われる

セシリア「行きなさい、ブルー・ティアーズ!!」

セシリアの言葉と同時に、俺の目の前にセシリアの横を浮遊していたピットが2機現れる

そして、その砲身から閃光が放たれ俺に直撃する

蒼也「っ!!」

バリアー貫通、ダメージ98。シールドエネルギー残量405

そして、その衝撃で動きが鈍っていた俺を狙って

セシリア「終わりですわ

」

さらに追加された2機のピットとスターライト、計7つの砲身から

の閃光が俺に放たれた

蒼也・side out

一夏 side

一夏「蒼也!!」

千冬「よく見る織斑、まだ御剣は負けてはいないぞ」

一夏「え……………」

俺が画面を見ると背中に先ほどまで無かった翼のようなスラスターが付き、両側の腰にはレール砲を思わせるような武器がついていた

一夏 side out

蒼也 side

セシリア「あ、あなたも初期設定だけで私と戦っていたんですの！

「？」

蒼也（ああ、そうか……。この感じ。これで、「フリーダム」は俺の専用機体になったんだな）

俺は変化した装甲や武器を確認する

蒼也（ラケルタ・ビームサーベル……。これか？）

俺はビームライフルを閉まって腰にセットされていた細長い棒を手にする

すると、手にしたとこのさきの穴から蒼い光の剣が現れた

シールドエネルギー減少、残量150

蒼也（つまり、これはシールドエネルギーを媒介に形になる武器ってわけか）

残っていたエネルギーがラケルタを出して減ったことで特性を理解する蒼也

セシリア「くっ……喰らいなさい!!」

7つの砲身から再び閃光が放たれる

しかし

蒼也「ふっ……」

少し動いただけで全ての閃光をよける蒼也

セシリア「なっ……!!?」

蒼也「はあ!!」

両腰のクスイフィアス・レール砲でそれぞれピットを破壊する蒼也

セシリア「そんな!?でも、まだわたくしが有利ですわ!!」

残ったピットでタイミングをずらしながら蒼也に撃つセシリア

蒼也「それは……もう見切った!!」

蒼也はタイミングがバラバラな放射にも関わらず全て避けたりビームサーベルで斬り落とし、セシリアに接近する

セシリア「そんな!?!」

蒼也「はああああああああ!!!!!!」

右手のビームサーベルでセシリアを一閃する

それと同時にビームサーベルの光も消失する

蒼也（他になんか……これは？）

蒼也はフリーダム武装を確認しているとある1つの項目を発見した

蒼也（ちょうどいい、これで終わらせる……！！）

蒼也はセシリアから離れ、全ての砲身を構える

ただの棒になったビームサーベルを戻し、ビームライフルを右手に
持ち

両腰のレール砲を構え

背中のウイングスラスターに隠れていた2機のバラエーナ・プラス
マ収束ビーム砲を展開する

マルチロックオンシステム発動。ハイマツトフルバースト、発射可能

画面が現れ、4機のピットとセシリアにロックオンカーソルがあてられる

セシリア「くっ……ダメージがまだ」

蒼也「これで終わりだ、オルコットさん」

セシリア「え………!?!」

蒼也の声でようやく自分がロックオンされている事に気がついたセシリア

蒼也「ハイマツトフルバースト………発射あああああああ
ああああ!?!?!?!」

そして、構えられていた5つの砲身から閃光が放たれ

セシリア「きゃあああああああ！？」

4機のピットとセシリアを撃ち抜いた

『試合終了。勝者　　御剣蒼也』

蒼也「勝った……………」

蒼也が一息つくがセシリアがアリーナの地面に落下し始めたのを見た

蒼也「あぶな！？」

直ぐにセシリアを抱きかかえ、Aピットに戻る蒼也

セシリア「・・・・・・・・ん」

蒼也「大丈夫か、オルコットさん？」

セシリア「わたくし・・・・・・・・負けましたのね」

蒼也「とにかく、身体に異常が無いか先生に診てもらおうか？」

セシリア「は、はい・・・・・・・・」

こうして、結果としては男組1勝、セシリア1勝となった

蒼也 side out

セシリア
side

セシリアはあの後、保健室で診察を終え自室に戻った

セシリア（今日の試合）

まず思い出していたのは一夏との試合

勝ったはずなのにセシリアは困惑し、落ち着いていられなかった

セシリア（織斑……一夏）

そして、自分を負かした蒼也の事を思い出す

セシリア（御剣……蒼也、わたくしに………かった男）

一夏も蒼也にもセシリアは共通のものを見つけていた

セシリア（あのような瞳………強い意志を持った瞳。他者に媚びる事のない眼差し）

そして、自分を抱える蒼也の顔を思い出すと胸が熱くなるのをセシリアは感じていた

セシリア「織斑一夏………」

一夏の名前を呟くが特に変化は無い

セシリア「御剣、蒼也……」

次に蒼也の名前を呟くとまた胸が熱くなるのを感じた

セシリア（……………）

彼の事をもっと知りたい……………

知りたい、蒼也の事を……………

セシリアは自身の唇にそつとで触れる

その唇は触れられる事を望んでいたかのように不思議な興奮をセシリアに与えていた

そして、彼女がいる浴室には水の流れる音がただただ響いていた・
・
・
・
・
・
・
・
・

セシリア s i d e o u t

第2話 クラス代表決定戦！！（後書き）

セシリア陥落

そして次回は鈴の登場

皆さん、お楽しみに！！

第3話 転校生はツンデレツインデール？（前書き）

第3話 転校生はツンデレツインテール？

一夏 side

クラス代表決定戦の翌日、朝のSHRで俺は起きるはずがないと思
っていた事が起きた

真耶「では、一年一組の代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がり
で感じが良いですね！」

クラス内に女子の声が盛り上がって聞こえる

暗い顔をしているのは俺だけだった、俺だけだった……

一夏「先生、質問です」

真耶「はい、なんでしょうか織斑君」

俺は拳手して山田先生に疑問をぶつけた

一夏「なぜ俺が代表なんですか？俺は負けましたし、ここは蒼也かセシリアが妥当では……」

真耶「それは

」

蒼也・セシリア「俺^{わたくし}が辞退したからだ（ですわ）」

セシリアが立ちあがって腰に手を当てるポーズをとりながら言い、蒼也が拳手して言う

タイミングほぼ一緒だったな……気が合いそうだな、2人とも

セシリア「素人同然のあなたが戦ったのはわたくしセシリア・オルコットだったのですから。負けるのは仕方ないかと。考えれば当然の事ですわ」

うぐっ・・・・・・・・事実だから反論んできん

セシリア「それに・・・・・・・・わたくしも大人げなく起こった事を反省しまして」

うん、それで？

セシリア「『一夏さん』か『蒼也さん』にクラス代表を譲ろうと決めました。しかし、蒼也さんは辞退するとおっしゃったので一夏さんに決まった訳ですわ」

そうか、つかいつの間に俺を名前で呼ぶように・・・・・・・・って

一夏「おい蒼也！！お前は勝ったんだからお前が代表になれば良いだろ！！」

俺は立ちあがって席に座っている蒼也の方を向く

蒼也「いや、俺はそこまで目立ちたくないから。それに、俺は代表なんてやってられん」

一夏「けどよ!」

俺はさらに反論しようとしたが

「いやあ、セシリア分かってるねー」

「うんうん。せっかく男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

「私は御剣君が良かったんだけどなあ……………」

セシリア「当面はわたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がお二人にIS操縦を教えて差し上げれば、素晴らしい成長を遂げ

」

第「あいにくだが、一夏の教官は足りている。『私』が、直接頼まれたのだからな」

第が机をパンと叩いて立ちあがって言った

セシリア「そうですか？でも、CランクのあなたがわたくしAランクのようにご教導出来るのかしら？」

第「ラ、ランクは関係ないだろう！！」

あー、うん。とにかくだ……………

誰でもいいから俺にISの操縦を教導してくれ……………

一夏 side out

蒼也 s i d e

蒼也（おーおー、篠ノ之さんもオルコットさんも張り合ってるなー）

俺は2人の張り合いを聞きながら教科書を読んでいた

蒼也（一夏、お前に譲ったのはそういうのは俺には似合わないからだよ……俺は、主人公キャラなんか似合わないから……）

一夏は机に沈んでいて、2人はまだ言い争っている

蒼也（ま、頑張れよ。一夏）

あ、3人とも織斑先生の出席簿に叩かれた

3人は千冬の相棒によって鎮圧されていた

日は進み、四月の下旬

俺のクラスは織斑先生によるISの基本的な飛行操縦の授業を受けていた

千冬「織斑、御剣、オルコット。試しにお前らが飛んでみせろ」

一夏は右手のガントレット、セシリアは左耳のイヤークラス、俺は右手の剣のブレスレットに手をかけた

3人がISの展開を終え、千冬が声をかける

千冬「よし、飛べ」

3人は一斉に飛び上がった

上昇速度はセシリア、蒼也、一夏の順だった

千冬「何をしている織斑、スペック上では白式の方が出力が上だぞ」

一夏は早速お叱りを受けていた

セシリア「くすつ、一夏さん。イメージは所詮イメージ。自分に合った方法を模索する方が建設的ですよ」

一夏「そう言われてもなあ……なんでセシリアや蒼也は普通にいられるんだよ。俺は全然慣れねえよ」

蒼也「俺だってまだ慣れてないさ、セシリアのようにうまく飛べないんだからな」

この数週間間に俺はセシリアを名前で呼ぶようになっていた

というよりセシリアがそうしてくれと言ってきたのだが

そして、千冬から通信が来る

千冬「御剣、織斑、オルコット。急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から10cmだ」

セシリア「では蒼也さん、一夏さん。お先に」

セシリアがそう言って地上に向かい、止まる

見事成功したようだ

蒼也「じゃ、次は俺が行くか。じゃあな一夏」

一夏「おう」

俺は一夏に言って地面に向かう

蒼也（やっぱまだ慣れないな……）

そして、衝突ギリギリの所で機体を止めた

千冬「御剣、もう少ししっかりやれ。3cmオーバーだ」

御剣「はい……………」

そして最後に一夏が向かって来る

ギュンッ

!!!!

ズドオオンッ

蒼也（あーあ…………グラウンドに一夏作クレーターの出来上がり…………）

千冬「馬鹿者。グラウンドに穴を開けてどうする」

一夏「すみません……………」

箒「情けないぞ一夏。昨日私が教えてやっただろう」

姿勢を直した一夏を箒が待っていた

箒「大体貴様は

」

セシリア「まあまあ篠ノ之さん。お説教は後にして下さらない？」

箒「何？」

そしてまたセシリアと箒のぶつかり合いが始まり、2人は千冬の出席簿アタックを喰らうのであった

次の日、一夏と俺はそろって登校していた

そして、クラスに入ると同時に女子から話しかけられる

「織斑君、御剣君。おはよー」

「2人とも聞いた？2組に転校生が来るって噂!!」

蒼也「そうなのか？」

「うん、なんでも中国の代表候補生なんだって」

蒼也「ほー」

あ、代表候補生と言えば

セシリア「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

我がクラスの代表候補生、セシリアが腰に手を当てたポーズで言う

第「ふん、このクラスに転入するわけではないのだろう？ いちいち騒ぐ必要はない」

自席に座っていた第がいつの間にか一夏の隣に来ていた

セシリア「一夏さん！！他クラスに負けない為にも今日の放課後からより実践的な訓練をしましょう！！わたくしが相手をいたしますわ！！専用機持ちはわたくし達3人だけなのですから！！」

？「残念だけど、その情報は古いよ」

声が聞こえ、そちらを向くと教室の入り口にツインテールの女の子が此方を見て立っていた

蒼也「誰だ？」

？「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。悪いけど、簡単には優勝出来ないから」

ツインテールの女の子がそう言うってから一夏が口を開いた

一夏「鈴・・・？お前、鈴か？」

鈴「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日はあんた達に宣戦布告に来たって訳」

そう言うと同時にツインテールが軽く揺れる

一夏「なに恰好付けてるんだ？似合わねえぞ」

鈴「んなっ・・・！？なんて事言うのよ、あんた」

千冬「おい」

鈴「何よ！？」

あ、あの子やっちまった

バシンッ！！

鈴の頭に出席簿が叩き込まれた

我がクラスの担任、織斑先生の登場である

千冬「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

鈴「ち、千冬さん……………」

千冬「織斑先生と呼べ。そしてさっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

鈴「す、すみません……………」

千冬に譲るようにドアからどく鈴

鈴「後でまた来るからね！！逃げないでよー夏ー！！」

若干涙目で自分のクラスに戻っていった鈴であった

蒼也「なあ一夏……」

一夏「ん？なんだ？」

蒼也「彼女って……ツンデレか？」

一夏「……分かん」

そして、チャイムが鳴りSHRが始まった

第3話 転校生はツンデレツインテール？（後書き）

天照大神「どうも天照大神です」

蒼也「御剣蒼也だ」

天照大神「君は何と言うか……一夏に出番譲る気なの？」

蒼也「俺には主人公のような出番は似合わん」

天照大神「そうか……あ、タイトルですが鈴はツンデレだ
と思う方は拳手お願いしますww」

蒼也「ではでは」

鈴「あたしはツンデレじゃないわよ……!..!」

一夏「どうした鈴？いきなり叫んで」

鈴「な、何でもないわよ！……！」

ではでは

第4話 決戦！！ クラス対抗戦（リーグマッチ）

蒼也 side

授業は始まり各々がノートをとるなど誰もが普通の行動をしていた
だけど

千冬「篠ノ之、答えは？」

篤「は、はい！？」

何故か一夏を見ていた篤を名指しし、回答を求める織斑先生

千冬「答えは？」

篤「……………き、聞いてませんでした……………」

ばしーん！

箒の頭に織斑先生の出席簿が振るわれた

普通箒はこんな事しないはずなんだが………？

そしてそれは箒だけでは無かった

千冬「オルコット」

セシリア「……例えばデートに誘うとか。いえ、もっと効率的な……」

千冬「………」

ばしーん！！

教室内にまた、同じ音が響いた

織斑先生は呆れた表情で頭を叩いていた………

第・セシリア「一夏（蒼也さん）のせいだ（ですわ）！！」

蒼也・一夏「はあ！？」

午前中の授業が終わり、昼休みになって4人で集まった瞬間、開口一番で俺達は文句を言われた

午前中、2人は山田先生に注意5回、織斑先生に3回も叩かれていた
正直自業自得なのだがなんで俺と一夏のせいになるんだ？

一夏「と、とにかく飯食おうぜ」

蒼也「そうだな、話は食いながら聞くからさ」

第「む・・・ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

セシリア「そ、そうですね。言って差し上げない事もなくなつてよ」

2人の言葉に適當に答えつつ俺達は移動した

鈴「待ってたわよ、一夏!!」

鈴音さんが食券機の前で立ち塞がっていた

一夏「鈴、とりあえずそこをどいてくれ。食券出せないし、通行の邪魔になってるぞ」

鈴「う、うるさいわね。分かってるわよ」

普通に会話してるな、2人とも仲良しだな

その後、鈴音さんを加えて5人でテーブルに座った

鈴「そういえば一夏、あんたなにIS使ってるのよ。ニュースで見た時ビックリしたじゃない」

先程から一夏と鈴音さんの間で会話が続いていた

第「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

セシリア「そうですね！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの!？」

ん？そうなのか？

俺も聞きたくて一夏と鈴音さんの方を向いた

鈴「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ……………」

一夏「そうだぞ。俺達はただの幼馴染だよ、つかなんでそんな話になるんだ？」

鈴「……………」

そう言った一夏を怒りがこもった目で見る鈴音さん

ああ、そう言う事が……………

一夏「？なに睨んでるんだ、鈴？」

鈴「何でもないわよ！！」

一夏の言葉に怒る鈴音さん

箒「・・・・幼馴染？」

一夏「ああ、箒が転校するのと入れ替わりで鈴が転校してきたんだ。中二の終わりに国に帰ったから、会ったのは一年ちよつとぶりなんだ」

鈴「そ、そういえばそうだったわね」

一夏「まあ、簡単に言えば箒が「ファースト幼馴染」、鈴が「セカンド幼馴染」って事だな」

鈴「・・・・・・・・・・」

箒「そうか・・・・・・・・私が、最初なのか・・・・・・・・」

一夏の言葉に鈴音さんは少し落ち込み、箒は嬉しそうだった

ん？まさか箒も・・・・・・・・なのか？

その後も色々あつて昼食は終わった

夜、俺は自室で俺に話があると来ていたセシリアと話していた

セシリア「ですから、一夏さんに勝ってもらう為にも、蒼也さんの強化訓練も必要なのですわ」

蒼也「ん、それは分かってるんだけどなあ……俺、一夏と戦うと大体引き分けるか負けてるし……」

俺と一夏はこれまで数回模擬戦をしているが俺は一回も勝った事が無い

蒼也「やっぱ一夏のあれが俺には苦手なんだよなあ……」

そう言った時、隣の部屋から大声が聞こえてきた

『とにかく！！部屋は代わら
！！自分の ！
に戻れ！！！！』
いくのはそちらだ

この声って………箒のだよな？

セシリア「箒さん、一体なんで叫んでいるのでしょうか？」

蒼也「分かん」

『最つつつ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けない奴！！犬に噛まれて死ね！！！』

バタンッ！！

蒼也「今のは………鈴音さんの声か？」

セシリア「ええ、そのようでしたわね………」

俺とセシリアはよくわからず、そのまま話を再開した・・・

それから数週間、時は進んで学年別トーナメントの日が訪れた

一回戦の一夏の相手、それは鈴音さんだった・・・

蒼也 s i d e o u t

一夏 s i d e

試合当日

今俺はアリーナ内でISを起動した状態で鈴と対峙していた

鈴のIS『シエンロン甲龍』、その機体は肩の横に浮いている棘付き装甲が攻撃的な自己主張をしているように思えた

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、俺と鈴は空中で5m程距離を開いて向き合う

会話はISの解放回線オープン・チャンネルで交わしていた

鈴「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげろよ」

一夏「雀の涙位だろ。そんなものいらねえよ、全力で来い」

こう言うのには強がりでも何でもない理由がある。俺は真剣勝負で手を抜くのも、抜かれるのも嫌いだ

全力でやって、初めてそこに意味が生まれる。勝負とはそういうものだ

鈴「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。」
「シールドエネルギー」を突破する攻撃力があれば、本体にもダメージを貫通させられる」

知っている、どうやらISの武装には操縦者に直接ダメージを与える「ためだけ」のものもあるらしい

まあ、それは規定で使えないらしいが

『それでは両者、試合を初めて下さい』

アナウンスの言葉の終わりと同時にピーツとブザーが鳴り響き、それが切れる瞬間に俺と鈴は動いた

ガギイイイインツ！！

俺が瞬時に展開した「雪片式型」ゆきひらにがたが物理的な衝撃で弾き返される

俺は数日前からセシリアに習っていたクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回をどうにかこ

なし、鈴を正面に捉えた

鈴「ふうん、初撃を防ぐなんてやるじゃない」

鈴の手には両端に刃のついた、というよりもはに持ち手が付いている巨大な青竜刀――いや、それとかけ離れた形状の武器をバトンでも回すかのように持っていた

しかも、縦横無尽に鈴の手によって斬り込んで来るだけではなく、高速回転している為、俺は刃をぶつけてさばくのに苦勞していた

一夏（不味い……このままじゃ消耗戦だ。一度距離を
）

鈴「

甘いっ――！」

鈴の方のアーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃に『殴り』飛ばされた

鈴「まだまだ、いまのはジャブだからね

」

ドンッ！！

一夏「ぐあっ！？」

先ほどよりも強い衝撃に殴られ、俺は地表に打ちつけられた

一夏 side out

蒼也 s i d e

蒼也「なんだあれは……………」

箒「ああ……………」

俺と箒はピットからリアルタイマーモニターで試合を見ながら呟いていた

セシリア「『衝撃砲』ですわね。空間に直接圧力をかけ砲身を生成、余剰で生じた衝撃自体を砲弾化して撃ち出す

」

同じくピット内にいたセシリアが俺と箒の疑問に答える

俺はそれを聞いていたが箒はモニターに映る一夏を見つめていた

蒼也（勝てよ一夏……お前を大事に思っている筈の為に）

俺は一夏の勝利を願いつつモニターに意識を戻した

蒼也 s i d e o u t

一夏 s i d e

鈴「よくかわすじゃない。衝撃砲『龍咆』は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

砲撃の射線はあくまで一直線だ

しかし、操縦者である鈴の能力が俺を軽く凌駕している

基礎のものを、高いレベルで習得しているのだ

一夏（ISのハイパーセンサーに空間の歪み、大気の流れを探らせてるけど、これじゃ遅い。撃たれてからじゃ駄目だ。何処かで・・・
・・・先手を打たないと!!）

その時、俺は右手に持つ雪片式型をぐつと握りしめながら、先週の訓練を思い出していた

「夏」

『バリアー無効化攻撃』？」

俺が効き返すと千冬姉が小さくうなづく

千冬「《雪片》の特殊能力がそれだ。相手のバリアーに関係なく、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与える事が出来る。そうすると、どうなるかわかるか、篠ノ之？」

俺の右横にいた箒に問う千冬姉

箒「は、はい。ISの『絶対防御』が発動して、結果大幅なシールドエネルギーを削ぐ事が出来ます」

蒼也「そうか………それなら、一発逆転が狙えるな」

左横にいた蒼也が呟く

千冬「その通りだ。私がかつて世界一の座にいたのも、《雪片》のその特殊能力によるところが大きい」

3年に一度行われるISの世界大会『モンド・グロッソ』、その第
一回において優勝したのが千冬姉だ

初代世界最強の姉をもつ弟の気持ちは、とても複雑にして怪奇なんだとそのときに身を持って知った

セシリア「でしたら、やはり最後の一撃を喰らっていればわたくしはまけていたのですか？」

千冬「ああ、だろうな。しかし、織斑がまけたのは必然だ」

一夏「え？シールドエネルギーが0になったから負けたんじゃない

」

千冬「馬鹿者。《雪片》の持つ特殊能力、それを行うにはどれほどのエネルギーが必要になると思っている？」

一夏「あー・・・・・・・・・・」

その言葉で俺は理解した

蒼也「つまり、自身のシールドエネルギーを攻撃に転化しているところ？」

千冬「ああ、つまり白式は「欠陥機」だ」

一夏「け、欠陥機？欠陥機っていったよな今！？」

その言葉に反応した千冬姉からの出席簿アタックが俺の頭にヒットした

教師に対する言葉使いは気をつけよう・・・・・・・・・・

千冬「言い方が悪かったな、「ISはそもそも完成してないのだから欠陥も何もない」。ただ、他のどの機体よりも攻撃に特化しているだけだ。大方、拡張領域バススロットも埋まっているのだろう？」

一夏「そ、それも欠陥だったのか……」

千冬「人の話を聞け。本来拡張領域用に空いているはずの処理を全て使って《雪片》を振るっているのだ。その威力は、ISの中でトップクラスだぞ？」

そういえば、千冬姉のISも《雪片》しかなかったな……

千冬「大体、貴様のような素人が射撃戦闘が出来るのか？反動制御、弾動予測からの距離の取り方、それに

」

一夏「……………ごめんなさい」

俺は自分の非を認め、素直に謝った

千冬「分かればいい、それに

」

千冬姉が俺をいつもの顔で見る

千冬「一つの事を極める方が、お前には向いているさ。なにせ
私の弟だ」

その後は訓練時間を近接訓練、急加速停止といった基礎移動技能に費やした

幸い、筈と行っていた剣道も『刀』の間合いと特性を再度理解するのに生かす事が出来た

一夏（後は・・・負けないって気持ちで乗り越えてやる！！）

俺は気合いをいれ、鈴を見つめる

一夏「鈴」

鈴「な、なによ」

一夏「本気で行くからな」

真剣に鈴を見つめる

鈴は俺の気概に押されたのか、曖昧な表情を浮かべていた

鈴「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……
と、とにかくっ！！格の違いってものを見せてあげるわよ！！」

鈴はバトンのように両刀青竜刀を一回転させて構えなおす

一夏（この一週間で身に付けた「瞬間加速」^{イグニッションブースト}、これと雪片二型の能力。両方で一気に決める！！）

瞬間加速は出しどころを間違えなければ代表候補生クラスと渡り合えるほどの技術だ

俺は意識を集中させる

一夏「うおおおおおおお！！！！！！」

わずか一回限りの奇襲、俺はそれを決行した

その時

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！

突然、アリーナ内に大きな衝撃が走った

一夏 side out

第4話 決戦！！ クラス対抗戦（リーグマッチ）（後書き）

長くなるので此処で一端切りました

次回も戦闘です

ではでは

第5話 専用機組VS謎のIS!!

一夏 side

な、なんだ!?

俺と鈴は同時にアリーナの中心を見る

鈴「一夏、試合は中止よ!!すぐにピットに戻って!!」

一夏「え……?」

警告。ステージ中央に熱源、所属不明のISと断定。ロックされています

一夏「なっ!?!」

破られたアリーナはISと同じもので作られている。つまり「それを貫通し、破壊できるだけの攻撃力を持った機体が此方をロックしている」

鈴「一夏、早く!!」

一夏「お前はどうすんだ、鈴!？」

鈴「あたしが時間を稼ぐ、その間にあんたは逃げて!!」

一夏「なっ……女を置いて逃げれるかよ!!」

鈴「仕方ないでしょ!？あんたの方が弱いんだから!!」

くそっ………なんで俺は……!!

鈴「別に、あたしも最後までやり合うつもりは無いわよ。こんな異常事態、先生達が来てすぐに収拾してく

」

！？ま、まずい！！

一夏「あぶねえ！！」

俺が鈴の身体を抱えて横に移動する

その後、俺達がいた空間が熱線で砲撃された

一夏「嘘だろ・・・？セシリアの武器より威力が上じゃねえか・・・」

ISに付いているハイパーセンサーの簡易解析で熱戦の熱量を知った俺は冷や汗を流した

鈴「つゝゝゝゝゝゝ、は、早く離しなさいよ！..馬鹿！..」

一夏「おお、おい暴れるなよ！！
つて馬鹿、殴るな！！」

鈴「う、うるさいうるさいうるさい！！..！！」

シールドエネルギーで守られているものの殴られているという事実
に変わりは無かった

鈴「だ、だいたいあんたは何処触って
」

一夏「く、来るぞっ！！」

再び放たれた砲撃を避け、アリーナの中心を見るとそこには異形が
存在していた

一夏「なんだよ、あれ……………」

異形と言つべき理由は、特異とも言える「フル・スキン全身装甲」だった

一夏「お前、何者だよ」

？「……………」

上がってきた来た異形のISに一夏が問うが何も答えない

真耶《織斑君！凰さん！！今すぐアリーナから脱出してください！
！すぐに先生達がISで制圧に行きます！！》

ISの回線に山田先生がいつもより威厳のある声で加入してきた
けど

一夏「

いや、先生達が来るまで俺と鈴で食いとめます」

山田先生が驚いているのを無視して俺は抱きかかえている鈴を見る

一夏「いいな、鈴？」

鈴「だ、誰に言ってるのよ！！そ、それより離しなさいってば！！動けないじゃない！！」

おっと、忘れてた

俺は鈴を離すと、鈴は顔を真っ赤にして自分身体を抱きしめていた

真耶《織斑君！？だ、駄目ですよ！！生徒さんにもしもの事があったら》

山田先生の言葉はそこで途切れ、俺と鈴は敵ISの突進を回避して

いた

鈴「ふん、向こうはやる気満々みたいね」

一夏「そつみたいだな」

俺と鈴はそれぞれの武器を構えなおす

鈴「一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさい。武器、それしかないんでしょ？」

一夏「ああ、その通りだ。頼むぞ鈴。それでいくか」

互いの武器の切っ先を当てる

それが合図となり、俺達は即席のコンビネーションで飛び出した

一夏 s i d e o u t

蒼也 s i d e

真耶「もしもし織斑君！？聞いてます！？鳳さんも！聞いてますー
！？」

返事が聞こえなくなった2人に対し必死に叫ぶ山田先生

既に通信は聞こえてないんですが……

千冬「本人達がやると言っているのだから、やらせてみてもらうだろう」

真耶「お、お、織斑先生！？なにのんきなことを言ってるんですか！？」

千冬「落ち着け、コーヒーでも飲め。糖分が足りてないぞ？」

セシリア「せ、先生……？それ、塩ですよ？」

千冬「……………」

織斑先生がコーヒーに運んでいたスプーンを止め、箱に粒を戻す
すでにいくらかはコーヒーの中に入ってしまったが……………

千冬「何故塩が此処にある……………」

真耶「さ、さあ．．．．．あ！！で、でもそんな簡単なミスをする
ってことはやっぱり弟さんの事が心配
」

千冬「．．．．．」

山田先生の言葉でピット内に嫌な沈黙が流れる

もう少し空気読んでください、山田先生．．．．．

さて．．．．．

千冬「．．．．．待て、御剣」

御剣「．．．．．」

ピットから退出しようとしていた俺に気づいた織斑先生が俺を呼び
とめる

千冬「それにオルコット、貴様も何処に行こうとしている？」

訂正、セシリアも俺と同じで退出しようとしていた

セシリア「一夏さんと凰さんを助けに

」

千冬「駄目だ、貴様たちの武装では、今のような他対一の戦闘には向かん。それに、そのような訓練もしていまい？」

セシリア「っ

」

図星を突かれ、黙ってしまうセシリア

それでも俺は歩き、扉の前に立つ

蒼也「俺は……あいつのように主人公キャラなんて出来ない」

千冬「……………」

蒼也「でも……そんな奴をサポートする位なら、俺だって出来る。俺は……そういう生き方をするって決めているから……いくぞ、セシリア」

俺はそのまま扉を開けて廊下にする

セシリア「ま、待って下さいな蒼也さん!!」

セシリアは蒼也の後を追いつめた

蒼也「一夏、聞こえるか!？」

一夏《蒼也！？なんだ！？》

蒼也「俺が考えた作戦がある、よく聞いてくれ……………」

俺は廊下を走りアリーナに出れる場所を目指しながら一夏に作戦を話した……………

一夏《俺も同じ事を考えてた、蒼也。それで行こう》

蒼也「（やっぱりな…………）ああ、俺とセシリアももうすぐ着く所だ」

セシリア「はあ……はあ、一夏さん！失敗は許されせんわよ
！！」

一夏《ああ、頼んだぞ2人とも！！》

一夏との回線を切り、目的地に急ぐ俺達

一夏………やつぱ、お前は主人公だよ………俺には、
そんな事出来やしない……

蒼也 side out

鈴「話は……終わったのっ！？」

敵ISの砲撃を避けながら鈴が聞いてくる

一夏「ああ！！いいか

」

俺は蒼也と話した作戦を鈴に伝える

鈴「でも、それはあれが「無人機」っていうのが前提よ？あんた達のその勘、信じていいのよね？」

俺と鈴は戦闘中に敵ISのある事を気にしていた

それは動きがあまりにも「機械じみている」事だ

本来ISは人が乗らないと動かない

だけど例外は存在する、俺と蒼也がそのいい例だ

鈴「ちゃんと当てなさいよ一夏、あたしはあんたが

」

一夏「大丈夫だ、俺はお前を信じてる」

鈴「っ

行くわよ」

一夏「ああ

」

その時、アリーナ内に1人の声が響いた

箒「何をやっている一夏あつ!!」

アリーナのスピーカーから聞こえてきた声は箒のものだった

俺はすぐに中継室を見る

箒「男なら……男なら、その位の敵に勝てなくてなんとする
!?!?!」

しかし、その筈の行動に敵ISが興味を持った
しっかりと筈の方を向いている……………

一夏「やばいつ!! 鈴! やれ!!!!」

鈴「う、うんっ!!」

鈴が肩を押し出すような格好で衝撃砲を構える

そして、最大出力砲撃を行うため、補佐用の力場展開翼が後部に広がる

そして俺は「鈴の砲撃の射線上」に移動した

簡単にいえば、俺は鈴の正面に背を向けて構えている

鈴「しっかり……………決めなさい!!!!」

一夏「ああ!!!!」

鈴の衝撃砲が発射され、俺の背中に当たる

俺はそれを受けて瞬間加速イグニッション・ブーストを作動させる

瞬間加速の原理は「後部スラスタからエネルギーを放出し、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的ぬ加速する」

一夏「
オオオオオッ！！！」

俺の声と同時に右手の雪片二型が強く光り出す

そう、雪片の能力「零落白夜」だ

零落白夜を使用可能、エネルギー転換率90%オーバー

俺はその情報を聞くではなく理解していた

初めてISに触れた時に感じた一体感、それと同じ感じだった

一夏（俺は・・・千冬姉を、箒を、鈴を、関わる人全てを
守る！！）

そして、零落白夜を発動した雪片Ⅱ型は敵ISの右腕を斬り落とした
しかし、俺は左拳をもろに受け、さらには追撃の砲撃の対象にされる

箒・鈴「一夏っ！！」

大丈夫だ、後は・・・あいつらがやってくれる
そうだろ？蒼也、セシリア！！！！

蒼也「ああ！！」

セシリア「これで完璧ですわ！！！！」

唯一に残っていたアリーナにつながる入り口から2人の声が聞こえる

2人は既に全武装の発射態勢を終えていた

セシリア「喰らいなさい！！！！」

蒼也「ハイマツトフルバースト……………発射ああああああ
！！！！」

セシリアと蒼也、お互い5つの砲身。計10つもの砲撃が敵ISに
吸い込まれた

爆発を起こし、敵ISはアリーナの地上に落下した

蒼也「全く……………お前は、やっぱり主人公だな」

一夏「そんなんじゃねえよ、俺は」

通信で話しかけてきた蒼也と話す俺

鈴「一夏！？あんた大丈夫なの！？」

鈴が俺の横に来て心配そうな顔をする

一夏「ああ、大丈夫だ」

蒼也「ま、セシリアもご苦労さん」

セシリア「あ、ありがとうございます。蒼也さん」

しかし

敵ISの再起動を確認！警告！ロックされています！！

一夏「！？」

片方だけ残っていた左腕、それを最大出力携帯に変形させた敵ISが地上から俺を狙っていた

そして、俺にビームが迫ってくる

俺はためらいなく光の中に飛び込んだ

一瞬、青と白の色が見えそれも俺と同じ様に敵ISの装甲を貫いていた

．．．．．なんだ？人の気配を感じるぞ．．．．．？

？「一夏．．．．．」

その声はすぐ前から聞こえ、誰のものかもはっきりと分かった

一夏「鈴．．．．．？」

鈴「ひゃう！？」

俺が目を開けると鈴の顔がすぐそこにあった

俺の顔との距離は約3cm程だった

鈴「おおおお起きてたの！？」

顔を赤くして顔を離す鈴

一夏「あ、ああ・お前の声で目が覚めてな」

鈴「そ、そう・・・・・・」

鈴はどこか残念そうにしていた

一夏「あのさ・・・・・・その、いろいろ悪かった。すまん」

鈴「一夏・・・・・・」

何を謝っているのか理解した鈴は俺をじっと見つめる

一夏「ちゃんと覚えて入れなくてすまなかった。でも、今思い出し

たよ」

鈴「えっ・・・・・・・・」

一夏「料理が上達したら、毎日あたしの酢豚食べてくれる？」
「だ
ろ？ホントごめんな、今の今まで忘れてて」

鈴「あう・・・・・・・・べ、別にいいわよ！！」

一夏「それに、俺は約束の意味も間違えてたみたいだな。なあ、ホ
ントはどういう意味なんだ？」

鈴「そ、そんな事言えるわけないでしょ！？」

鈴は先ほどよりも顔を真っ赤にして言った

風邪でも引いたのか？

一夏」

「

ふと俺は夕暮れに染まった外を見る

一夏（俺は、守れたんだよな。皆を

）

夕暮れに染まった空はとても綺麗に、そして闇に染まりかけていた・
・・・・

一夏 side out

セシリア s i d e

保健室の前まで来ましたが一夏さんは大丈夫のようですね

蒼也「一夏は平気みたいだな」

私の横で廊下の壁に背を預けている蒼也さんがそう言う

蒼也「あいつは、俺なんかが敵わない程強い……………」

セシリア「で、でも蒼也さんのハイマツトに一夏さんは敵いませんわ。それに、雪片の能力に気を付けていれば蒼也さんなら勝てますわ……！」

蒼也「そうじゃない・・・・・・・・あいつは、心が強いんだ・・・・・・・・」

セシリア「えっ・・・・・・・・」

蒼也さんはそう言って歩いて行ってしまった

セシリア「でも・・・・・・・・わたくしは蒼也さん、あなたの方が強いと思ってますわ。だからこそ、わたくしはあなたに

」

セシリアの言葉は最後まで聞こえなかった

セシリア s i d e o u t

何処か暗い部屋

幾つもの画面にコンピューターが作動している部屋に敵ISの残骸はあった

真耶「これはやはり無人機でした。コアも未登録のものです……」

千冬「……………そうか」

真耶と千冬は画面を見ながら話していた

真耶「どのような方法で動いていたかは分かりません。しかし、織斑君と御剣君の最後の一撃で機能中枢が焼き切られていました」

千冬「……………そうか」

真耶「な、なにか心当たりでも？」

千冬「いや、ない」

今はまだ、な」

画面を見る千冬の目には彼女の現役時代を思わせるような鋭い瞳があった

蒼也「織斑先生、俺の部屋にベッドが1つ追加されていたんですが・
・・・・」

数日後、いきなり部屋に置かれていた新しいベッドの詳細を聞く為に蒼也は職員室の千冬の元を訪れていた

千冬「ああ、実は転校生がうちのクラスに来る。そのため、1人部屋だったお前の部屋に入れる事になった」

蒼也「転校生、ですか・・・・・」

千冬「ああ、まだ誰にも言うなよ？とはいっても、すぐにばれるだろうがな・・・・・」

蒼也「女子の情報源は凄いですからね・・・・・」

2人は苦笑いをしていた……………

？「……………」

銀色の髪の少女がIS学園の校門に立っていた

彼女の左目には眼帯がされており、彼女から発せられる雰囲気は軍人を思わせた

？「此処に……………奴がいる、教官に汚点をつけた張本人、織斑一夏が……………」

その少女はそのままIS学園の中に歩いて行った

そして、その少女がいなくなってから数分後

？「此处が、IS学園・・・・・・・・」

金色の髪をなびかせた青年がIS学園の校門に立っていた

？「・・・・・・・・」

その青年は例えるなら「貴公子」というのが一番似合っている雰囲気だった・・・・・・・・

第5話 専用機組VS謎のIS!!（後書き）

どうも天照大神です

最後の2人がいよいよ次回から書けます!!!

此処まで良く頑張った.....

では、次回もお楽しみに!!!

第6話 転校生、新たな男子と銀髪の少女（前書き）

今回は短めです

そしてカットしすぎました・・・

第6話 転校生、新たな男子と銀髪の少女

蒼也 side

後日、一組の女子は朝のHRで言葉を失っていた

それもその筈だ………

？「シャルル・デュノアです。フランスから来ました、この国では不慣れな事も多いかと思いますが皆さん宜しくお願いします」

黒板の前に金髪の男子が礼儀正しく自己紹介をしているのだから

「お、男………？」

クラスの女子の誰かからそんな声が漏れる

シャルル「はい。此方に僕と同じ境遇の方が2人いると聞いて本国から転入を」

俺はその瞬間、両手で耳を塞いだ

「きゃ」

シャルル「はい？」

「「「「きゃあ

「「「「！！！」

ほら来た、女子達の必殺技。歓喜のソニックウェーブ

「男子！！3人目の男子！！！」

「しかもうちのクラス！！」

「美系！！守ってあげたくなる系の！！」

「地球に産まれて良かった~~~~!!!!」

三者三様、いや四者四様だなこりゃ

千冬「あー、騒ぐな。静かにしろ」

真耶「そうですよ、まだ自己紹介は終わってませんよ」

そう、転校生は2人いる

シャルルの隣には輝くような銀髪、それを腰近くまで降ろし左目に黒い眼帯をつけている女子が立っている

右目は赤色だが、暖かいと言うよりは冷たい感じがする

千冬「挨拶しろ、ラウラ」

？「はい、教官」

ラウラと呼ばれたその女子が織斑先生の言葉に答え、教室を見渡す

？「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

その後の言葉を誰もが待っていたが一向に言葉は発せられない

真耶「あ、あの・・・・・・・・」

ラウラ「以上だ」

ああ、終わりなのね

俺がそう思っていた時、ラウラが一夏の前まで歩いて行く

バシンッ！！

蒼也「！？」

一夏はラウラの手から平手打ちを喰らっていた

当の本人も何が起きたのか分からないようだ

ラウラ「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

一夏「いきなり何しやがる！！！！」

ラウラ「ふん・・・・・・・・」

一夏が我に返りラウラに言うがラウラは無視して元の位置に戻った

千冬「あー……今日の授業は二組と合同でISの模擬戦を行う。各自、着替えて第二グラウンドに集合だ」

織斑先生の言葉に皆が準備を始める

千冬「織斑、御剣。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

織斑先生と山田先生が教室から出て行くと同時にシャルルが俺と一夏の所に来た

シャルル「君達が織斑君と御剣君？初めまして、僕は」

一夏「話は後だ、いくぞ蒼也！」

蒼也「ああー！」

シャルル「へ？」

俺はシャルルの手を取って一夏と共に教室から出る

一夏「女子が教室で着替えるから、俺達は空いてるアリーナの更衣室で着替えるんだ」

蒼也「で、急がないと奴らが来る・・・・・・・・」

シャルル「奴ら・・・・？」

俺達が階段を下りて一階に向かおうとする

しかし

「ああっ！！転校生発見！！」

「しかも織斑君と御剣君も一緒!!」

「男子3人!?これは是非拝まないと!!!!」

ほら来た・・・・・・・・

シャルル「え、えっと・・・・・・・・?」

蒼也「この学園で男は俺達3人。女子はそれ以外・・・・・・・・これで分かっただろ?」

一夏「急ぐぞ蒼也。時間がやばくなる」

蒼也「ああ、そうだな」

俺達は今だ混乱しているシャルルの手を引っ張ってアリーナの更衣室まで走っていった

アリーナに到着し織斑先生からおしかりを受けた俺達は織斑先生から話を聞いていた

しかし、途中で空から音が聞こえてきた

真耶「あああー！っ！ど、どいて下さいー！ー！？」

一夏「へっ？」

一夏の周りにいた俺らはしっかりと回避し、一夏は落ちてきた山田先生の突撃を喰らっていた

その時の出来事で箒と鈴に殺されかけたのを此処に記しておこう・
・
・
・
・

その後、山田先生対セシリア・鈴の模擬戦が行われたが山田先生が
2人を圧倒して終わった

千冬「専用機持ちちは織斑、御剣、デュノア、オルコット、ボーデヴ
イツヒ、凰だな。では、グループに別れて実習を行う。各グループ
のリーダーは専用機持ちがやる事。いいな!!」

その言葉で女子が俺達男子の元に群がる

「織斑君、私に教えて!!」

「御剣君、私は御剣君に教えてもらいたい!!」

「デュノア君、私に教導して~~~~!!」

その状態に呆れた織斑先生から雷が落ちた

千冬「この馬鹿者どもが・・・出席番号順に1人ずつグループに入れ！！順番はさっき言った通りだ！！すぐに行動しない者にはグラウンド100周だ！！」

女子の皆はすぐに行動し、実習が始まった

流石織斑先生、生徒に容赦ない・・・・・・・・

時は進み昼休み、俺達は屋上にいた

箒「……どういう事だ？」

一夏「？」

一夏の左隣にいた箒から声が漏れる

一夏「天気が良いから屋上で食べるって話だったろ？」

箒「そうではなくてだな……！」

箒が自分の左側にいる鈴、セシリアを見る

ちなみに俺達は屋上で円になって座っており

時計回りで俺、シャルル、一夏、箒、鈴、セシリアの順で座っている

一夏「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。それにシャルルは転校して来たばかりで右も左も分からないだろうし」

第「そ、それはそうだが……………」

一夏……………鈍感にも程があるだろ

第がため息を吐いてるぞ…………

鈴「ふふん一夏。私はね、今日はこれを作ってきたのよ」

鈴がタッパーのふたを外すと一夏に渡した

一夏「おお、酢豚だ！」

鈴「そ、あんたこの前食べたと言ってたし」

鈴はそういつて、ご飯の入った容器を自分の元に置く

一夏のタッパーには酢豚しか無いぞ・・・？

セシリア「蒼也さん、わたくしも用意してみましたの。よろしければどうぞ」

バスケットを開き、サンドイッチを1つとって俺に渡すセシリア

蒼也「お、ありがとうセシリア」

俺はそれを口に運び噛みしめる

そして俺は意識を手放した

気がついた時には既に授業は終わっており教室にはシャルルとセシリアが俺を不安そうに見ていた

蒼也「俺は・・・・・・・・・・？」

シャルル「大丈夫蒼也？急に気絶したから皆慌ててたんだよ？」

セシリア「幸い、近くにいた保険の先生に容体を確認してもらいまして・・・・・・・・ただ気絶しているだけだったみたいでしたのでー夏さんが教室まで運んだんですわ」

蒼也「そっか・・・・・・・・後で一夏には礼を言わないとな」

俺はバックを持って椅子から立ち上がる

蒼也「で、セシリアは分かるが何でシャルルがいるんだ？」

シャルル「えっと・・・僕は蒼也と同室なんだ。でも、鍵は蒼也が持つてるそうだからこうして待ってたんだ」

蒼也「そうか、それは悪かった。んじゃ、行くか」

シャルル・セシリア「うん（はい）」

俺達は雑談をしながら寮に向かった

第7話 打ち解けた重み（前書き）

どうも天照大神です

地震の起こした惨状に困っている私です・・・

なんとかこの話を書き上げました

どうぞ、ご読みください

第7話 打ち解けた重み

一夏 side

シャルルが転校してきてから5日

土曜日でもIS学園では授業が存在する

しかし、それも午前のみであり午後は完全な自由時間なのだ

俺達は全面開放されているアリーナを使って実習をしていた

シャルル「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

一夏「そうなのか？一応、分かってるつもりだったんだけど……」

俺はシャルルと軽く手合わせした後にレクチャーを受けていた

シャルル「最近は蒼也にも勝てなくなってきたでしょ？」

一夏「うつ……………」

ここ数日、蒼也と模擬戦をすると大抵ハイマツト・フルバーストで落とされている

瞬間加速すら読まれていて、だ

シャルル「それに……………3人の説明じゃ、誰だって理解しづらいよ……………」

俺と蒼也にこれまでレクチャーしてきた3人は

第『こう、すばーっとやってから、がきんっ！どかんっ！という感じだ』

鈴『なんとなく分かるでしょ？感覚よ感覚。……………はあ、な
んで分かんないのよバカ』

セシリア『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度回転ですわ』

皆さんはこれですぐに実行出来ますか？

一夏（大体なあ……ISスーツの露出が高すぎるんだよ……）

蒼也「どうした一夏？」

セシリアと話していた蒼也がいつの間にか俺の横に来ていた

一夏「はあ……なあ、お前は平気なのかよ？」

蒼也「？何がだ？」

俺は周りに聞こえないように蒼也に言う

一夏「お前はISスーツのあの露出を見て平気なのかよ？」

蒼也「ああ……もう、慣れた」

一夏「慣れたって……」

蒼也「あまり意識してると思うように動けなくなるからな、気にしていなかったら平気になっていた」

一夏「そ、そうか……」

俺には出来ん……

シャルル「一夏の「白式」って後付武装が無いんだよね？」
イ「ライザ」

おっと、シャルルのレクチャーの途中だった

一夏「ああ。何回か調べてもらったんだけど、
拡張領域バースロットが空いてないらしい。だから量子変換インストールは無理だってさ」

シャルル「多分だけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

蒼也「一夏のワンオフ・アビリティー……あれか」

一夏「えっと……ワンオフ・アビリティーってなんだっけ？」

シャルル「言葉通り、唯一使用の特異才能だよ。
本来なら、第二形態フォームから発言するんだけどね……」

一夏「てことは……白式の唯一使用はやっぱり「零落白夜」なのか？」

シャルル「だろうね。白式は本当に不思議だよ、それに……」

蒼也「織斑先生が使っていたIS「ブリュンヒルデ」と同じ能力……だろ？」

シャルル「うん、普通……そんな事は起きる事はないんだけどね」

一夏「ま、今考えなくたって大丈夫だろ」

シャルル「そうだね。じゃあ、射撃武器の練習してみようか。はい」

シャルルはそう言って俺にさっきまで使っていた五五口径アサルトライフル《ヴェント》を手渡した

一夏「あれ？他の奴の装備って使えないんじゃないのか？」

シャルル「普通はね。でも、所有者が使用許諾アンロックすれば使えるんだよ。今、一夏の白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」

一夏「おう」

俺はシャルルのレクチャーを聞きながら練習を始めた

一夏 side out

蒼也 side

一夏がシャルルのレクチャーを受けている間

セシリア「まったく……わたくしの理論整然とした説明の何が不満だというのかしら……」

第「ふん。私の話をちゃんと聞いていないのもそうだ」

鈴「あんなに分かりやすく教えてあげたのに、なによ……」

俺は3人の愚痴に付き合っていた

セシリア「まったく……蒼也さんは話を聞いて実行出来ましたのに……」

蒼也「いや…………俺は」

篤「まったく…………あいつはたるんでいる」

蒼也「あの……………」

鈴「バカ一夏……………」

蒼也（おーい一夏、俺には対処出来ねえわ……………）

その時

「ねえ、ちょっとアレ……………」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でトライアル段階って聞いてたけど……」

アリーナ内の女子のざわつきが聞こえ、俺は注目の的に視線を移す

ラウラ「……………」

そこにいたのはもう1人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・ボー
デヴィツヒだった

ラウラ「おい」

一夏の元にラウラがISの開放回線オープン・チャンネルを繋げていた

一夏「……………なんだよ」

一夏は気が進まない表情で答えていた

ラウラ「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い、私と戦え」

一夏「嫌だ、理由がねえよ」

ラウラ「貴様には無くても私にはある」

蒼也（あいつの理由・・・・・・・・織斑先生関係か？）

一夏「千冬姉の・・・・・・・・『モンド・グロッソ』決勝戦の不戦敗か」

ラウラ「そうだ。貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成しえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を

貴様の存在を認めない」

その瞬間、ラウラは自身の漆黒のI Sを戦闘態勢へシフトさせ、左肩に装備された実弾砲を発射した

ゴガギンッ!!

シャルル「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めるなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね」

蒼也「俺の友人にいきなり手を出されたら、俺だって見過ごせないな」

ラウラ「貴様らっ……………」

間合いから割り込んできたシャルルがシールドで実弾を弾き、同時に右腕に六一口径アサルトカノン《ガルム》を展開してラウラに向けていた

俺はラウラの後ろから ラケルタ・ビームサーベルをラウラの首筋に添えていた

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

アリーナ内に声が響き渡る

どうやら騒ぎを聞きつけた先生のような

ラウラ「…………ふん。今日は引こう」

ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートに歩いて行った

俺はそれを見送ってグラウンドの一夏とシャルルの側に降りる

シャルル「一夏、大丈夫？」

一夏「ああ、助かったよ。ありがとなシャルル、蒼也」

蒼也「なに、友人を助けるのは当たり前だろ？」

シャルル「今日はもう上がろっか。アリーナの閉館時間も近いしね」

蒼也「そうだな」

シャルル「えっと……先に着替えて戻ってて」

一夏「なあシャルル、なんで俺達と一緒に着替えないんだ？」

一夏の言つとおり、シャルルは今まで俺達と時間をずらして着替えていた

シャルル「えっと……」

鈴「はいはい、あんた達はさっさと行きなさい」

一夏「り、鈴……首筋、掴むな……」

蒼也「ああ、じゃあ先にいつてるぞシャルル」

シャルル「うん」

俺は鈴から一夏を受け取り、更衣室に引きずっていった

真耶「あのー織斑君、御剣君、デュノア君はいますかー？」

着替え終えて間もなく、外のドアから山田先生の声が聞こえてきた

一夏「はい？えーと、織斑と御剣はいます」

真耶「入っても大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりしますー？」

蒼也「いえ、俺も一夏も丁度おわった所ですよ」

真耶「そうですかー。それでは失礼しますねー」

ドアが開き、山田先生が入ってきて俺達の前に歩いてくる

真耶「ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。時間別になると色々問題が起きるので週に2回という事になります」

蒼也「まあ……そうだろうな」

一夏「本当ですか！？嬉しいです、助かります！」

真耶「い、いえ………」

山田先生の両手を歓喜のあまり握りしめる一夏

山田先生は急な事に顔を赤くしている

シャルル「なんでまだいるの一夏、蒼也………」

後ろから冷たい声のシャルルが話しかけてきた

蒼也「えっと……その……」

真耶「そ、そうそう！！織斑君と御剣君は今から職員室に来て下さい！！お二人のESについての書類を書いてもらうので」

一夏「あ、分かりました」

蒼也「じゃあシャルル、遅くなりそうだし今日は先にシャワー浴びててくれ」

シャルル「分かった……」

俺は一夏と一緒に山田先生について行った

蒼也「ふう、終わった」

一夏「蒼也。この前話したボディークリーム、持って来たぞ」

蒼也「サンキュー」

部屋の中に入ってきた一夏からボディークリームを受け取る

一夏「ん？シャルルがシャワー使ってるのか？」

蒼也「そうみたいだな。せっかくだし、これを使ってもらうか」

俺は椅子から立ち上がりボディークリームを持ってシャワールームと繋がっている洗面所兼脱衣所な洗面所へのドアを開ける

ガチャ

蒼也（ん？シャルルはもう出たのか？）

シャルル「あ……………」

蒼也「シャルル、ちょうど良かった。これ、いち……………か……………からの」

シャルル「そ、そう……………や？」

蒼也「な・・・・・・・・」

シャワールームから身体を出しかけていたのは見た事のない「女子」だった

女子だと分かった理由は簡単、胸があるからだ

シャルル？「きゃあっ！？／／／／／」

女の子は胸を手で隠しながらシャワールームに逃げ込む

蒼也「えっと・・・・・・・・その・・・・ボディーソープ、此处に置いておくぞ」

シャルル？「う、うん・・・・・・・・／／／／／」

俺はそのまま部屋に戻る

「夏」ど、どうした蒼也？」

蒼也「・・・・・・・・女子がいた」

「夏」は・・・・・・・・？」

「夏の疑問もすぐに解決するだろう」

彼女が出てくれば・・・・・・・・

シャルル？「あ、上がったよ……」

一夏「ほら、シャルルの声……じゃ」

蒼也「……………」

出てきたシャルル？を見て一夏も声を失う

そこには、女子が立っていたからだ……

蒼也「あ……………お茶でも飲むか？」

シャルル？「う、うん……………」

シャルル？は自分のベッドに腰掛け、俺は置いてある電気ケトルでお湯を沸かす

一夏は横の椅子に座っている

蒼也「ほら、気をつけろよ」

俺は熱いお茶をシャルル？に渡す

シャルル？「あ、ありが」

渡す際にシャルル？の指が俺の手に触れる

シャルル？「きゃあっ！？」

蒼也「うおっ！？」

手をひっこめたシャルル？にかかりそうになった零れたお茶を手でガードしたがいっきりにきりお茶がかかってしまった

蒼也「やべっ!!すぐに冷やさないと!!」

俺は急いで水道の所に行き流れ出した見ずに手を当てる

一夏「大丈夫か、蒼也？」

蒼也「あ、ああ」

シャルル「ご、ごめん!!大丈夫!？」

蒼也「ああ、すぐに冷やしたし火傷にはならないだろ」

シャルル「ちょっと見せて……ああ、赤くなってる……」

軽くパニックになっているのかシャルル？は俺の側に来て強引に手を取る

シャルル？「でも……………」

蒼也「その……………さっきから、当たってるんだが……………」
／／／／／

シャルル？「！！！！」

言われて体勢に気づいたシャルル？は俺から離れて胸を隠すように自身の身体を抱きしめる

シャルル？「心配してるのに……………蒼也のエツチ……………」
／／／／／

蒼也「うつ……………すまん」

それから数分後、お互いに落ち着いた俺達は話し始めた

一夏「なあ……お前、やっぱりシャルル……なんだよな？」

シャルル？「うん……そうだよ」

一夏「なんで男のフリなんかしてたんだ？」

シャルル「その……実家からそうしろって言われて……」

蒼也「……デュノア社の所長か」

シャルル「うん、社長……父からの直接の命令なんだ」

一夏「なんでそんな事

」

シャルル「僕はね．．．．父の、本当の子じゃないんだ」

蒼也・一夏「!!?」

シャルル「僕は愛人の子で．．．．お母さんが2年前無くなった時に、引き取られたんだ」

蒼也「．．．．．」

シャルル「検査の結果、僕はIS敵応能力が高いつて事が分かって、デュノア社のテストパイロットをする事になったんだ」

一夏「．．．．．」

シャルル「でも……暫くして、デュノア社は経営危機に陥った」

一夏「えっ……？でも、確かデュノア社は世界量産機IS製造第3位だったはずだろ？」

シャルル「そうだけど、僕が使ってるリヴァイヴは結局第二世代型なんだよ。他の国は第三世代型……だから、危機になったんだ」

一夏「そうか……」

シャルル「僕が男装してたのは、デュノア社が注目を浴びる為の広告塔、それに」

蒼也「俺達の……データ、か」

一夏「なっ・・・・・・・・」

シャルル「うん・・・・・・・・同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータもとれるだろう・・・・・・・・って」

一夏「そんな・・・・・・・・」

一通り話し終えたシャルルは一息ついた

その顔は何処かふつきれていた表情だった

シャルル「とまあ、そんな所かな。でも、2人にばれちゃったし、きっと本国に呼び戻されてデュノア社は消滅・・・・・・・・もしくは何処かの傘下に入るだろうね・・・・・・・・でも、僕には関係ないかな」

蒼也・一夏「・・・・・・・・」

シャルル「なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれて有難う、それに・・・・・・・・騙しててごめんね」

一夏「……………いいのk

」

蒼也「いいのか、それで……………」

シャルル「え……………」

一夏が言う前に蒼也の口から言葉が出てきた

蒼也「お前は……………それでいいのか？親だからって子供の自由を……………行動を奪う権利なんてあるもんか！！！」

シャルル「そ、蒼也……………」

蒼也「シャルルはこれからどうしたい？」

シャルル「分からないよ・・・時間の問題、だと思う。フランス政府もこの事をしつたら黙ってないだろうし、僕は代表候補生を降ろされて・・・よくて牢屋行きかな？」

蒼也「だつたら此処にいる！」

シャルル「え？」

蒼也「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に属さない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

シャルル「あ・・・・・・・・」

蒼也「つまり、３年間は此処にいても大丈夫だ。探してやるよ、なんとかなる方法は存在するさ」

シャルル「ふふっ……ありがと、蒼也」

シャルルは笑って答える

その笑顔は年相応の女の子の笑顔だった

蒼也（っ……シャルルの笑顔みてるドキドキしてくるノ
ノノノノ）

一夏「俺も協力する、なんとかなるさ」

シャルル「うん……ありがと」

俺はシャルルと顔を合わせるのが少し恥ずかしくなり、目をそらしていたが再度視線を向けた際に目が合ってしまった

シャルル「どうしたの？」

蒼也「い、いや……」

顔を覗き込んできたシャルルの顔と、襟元から見えている胸の谷間に心臓の鼓動が速くなる

蒼也「と、とりあえず一端離れてくれシャルル……」
／／
「

シャルル「？」

蒼也「いや……その、胸元が／／／／／」

シャルル「！？／／／／／」

指摘されたシャルルは頬を赤らめる

シャルル「さつきから蒼也・・・胸ばつか気にしてるけど・・・
み、見たいの？／／／／／／」

蒼也「・・・・・・・・はい？」

俺がシャルルの言葉に戸惑っている

コンコン

蒼也・一夏・シャルル「!？」

部屋の扉がノックされた音が聞こえた

蒼也 side out

第8話 救われた心と好意（前書き）

どうも天照大神です

今回の話はあれですね、シャルル可愛いよシャルル

それだけは譲れないですね

アニメ見た人は分かりますよね

では、本編をどうぞ

シャルル「わ、分かった」

そういつてシャルルはクローゼットの方に歩いて行く

蒼也「違う、こっちだシャルル」

シャルル「えっ？」

俺はシャルルの手を掴み、強引にシャルルのベッドに寝かせた
さらに布団をかぶせ、シャルの身体を見えなくさせる

セシリア「あら一夏さん、どうしてこちらに？」

一夏「あ、ああ。蒼也に頼まれていたボディークリームを渡しにきた
ついでだ」

セシリア「そうでしたか、では夕食も……って何をしていますの、蒼也さん？」

蒼也「シャルルが調子悪いみたいでな……布団をかぶせてた所だ」

シャルル「ご、ごほつごほつ……」

セシリア「あ、あらそうですの？でしたら蒼也さん、一夏さん。わたくしとこれから夕食を取りませんか？わたくしもまだでしたので……」

蒼也「そ、そうか。いいぞ」

一夏「俺もいいぞ」

セシリア「ではデュノアさん、お一人をお借りしますわ。お大事に」

シャルル「い、いほつ。いつてらっしゃい……いほつ」

俺はセシリアに腕を取られて廊下に出た

しかも身体を密着させてくる

篝「む……一夏、こんなところにいたのか」

すると廊下から出てすぐに篝と会った

セシリア「あら篝さん。わたくし達、これから3人で一緒に夕食ですの」

篝「なっ……で、では私も一緒に行こう」

セシリア「あらあら箒さん？一日四食は体重を加速させますわよ？」

箒「それなら問題は無い・・・・・・・・これがある！」

箒はどこから取り出したのか鞘に収められている剣を出していた

一夏「箒！？それ日本刀だぞ！？なんで此处に持ってきてるんだ！？」

箒「実家から送ってもらった。で、では行こうか・・・／／／」

箒は一夏の腕を取って身体をよせていた

一夏「なあ箒・・・・・・・・」

箒「な、なんだ？」

暫く廊下を歩いていると一夏が言いだした

一夏「歩きづらい」

箒「っ！」

一夏「いてっ!？」

一夏の言葉に怒った箒は一夏の腕をつねっていた

蒼也「た、ただいま……」

シャルル「お、お帰り蒼也……ってどうかしたの？」

部屋に戻ると身体を起こしていたシャルルが心配そうに俺を見ていた

蒼也「食堂に行くまでちょっと……な」

セシリアが俺の腕に密着していたため歩くたびに腕に柔らかい感触が当たっていた

俺だって男だ、なんにも感じないわけがない……

蒼也「っと、食堂からこれ貰って来たから。お腹すいてるだろ？」

シャルル「う、うん。ありが………！」

俺が持ってきたお盆を見たシャルルの顔が一瞬で固まってしまった

蒼也「どうした？」

シャルル「な、何でもないよ……い、頂きます」

お盆には焼き魚定食が乗っていてシャルルはぎこちなく箸を手にとって食べ始めたが

シャルル「あつ………」

ぽろっ

シャルル「あっ、あっ………」

ぼろっぼろっ

何度やつてもおかずを落としているシャルルに俺は話しかけた

蒼也「箸……苦手なんだな」

シャルル「う、うん……練習はしているんだけどね」

蒼也「食堂行ってスプーンでも貰って来る」

俺は廊下に向かおうとするが

シャルル「い、いいよ、そんな。なんとかこれで食べてみるから」

蒼也「はあ……シャルルは他人に甘える事を覚えろ。じゃな
いと色々損するぞ?」

シャルル「えっ……」

蒼也「まずは俺や一夏に頼ることから始めてみる。家庭の事情なん
て関係ない俺はシャルルの味方だ。だから、頼ってくれ」

シャルル「蒼也……」

シャルルは少し考え、纏まったのか口を開いた

シャルル「じゃ、じゃあ……蒼也が、食べさせて……
／／／」

蒼也「……………え？」

上目づかいでモジモジと言ったシャルルの姿を見た俺は一瞬固まってしまった

シャルル「駄目……………かな？」

蒼也「わ、分かった……………男に一言はないからな」

その後、シャルルが食べたい物を俺が箸で掴んで食べさせ始めた

蒼也 side out

一夏 side

数日後、俺は保健室にいた

理由は……

鈴「別に助けられなくてよかったのに」

セシリア「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

包帯付けになっているこの2人のお見舞いに来ているからである

2人は数時間前、アリーナで始まったラウラ・ボーデヴィツヒとの戦闘でISが解除される程のダメージを負い保健室に運ばれていたのだ

蒼也「だが俺達が介入していなかったら確実に今以上の怪我を負ってたぞ？」

鈴「そんなわけないでしょ!？」

セシリア「そうですわ!!このわたくしがこれ以上無様な醜態をさらすはずがありませんわ!!」

一夏「はいはい……」

シャルル「2人とも好きな人に恰好悪いところを見せちゃったから恥ずかしいんだよ」

一夏「ん？」

シャルルが飲み物を持って戻ってきた

「織斑君!!」

「御剣君!!」

「デュノア君!!」

保健室の中に女子の軍団が雪崩れ込んできた

入ってきたなんて生易しいものでは済まされないほどの勢いで

一夏「な、な、なんだなんだ!？」

蒼也「お、落ち着け皆!」

シャルル「ど、どうしたのみんな……」

「」「これ!!」「」

状況が飲み込めない俺たちに各々の女子が一枚の紙を差し出してくる

正直軽いホラーである、怖い

俺達はそれぞれ一枚受け取って書かれている文章に目を通す

蒼也「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが決まらなかった者は抽選により選ばれた生徒同時に組むものとする。締め切りは」

「ああ、そこまででいいから!!」

そして先ほどと同じように手が伸びてくる

怖ええ・・・

「私と組もう、織斑君!」

「私と組んで、御剣君!」

「私と組んで下さい、デユノア君！」

「私と組めばあんなことだって！」

「ちょっと！？私の方がいろいろしてあげるよ！！」

最後の2人、一体何を言ってるんだ……

俺は自身の考えを言う事にした

一夏（まずい、シャルルが女だって知ってるのは俺と蒼也だけだ・
……だとすると俺か蒼也意外と組むとシャルルに負担がかかっ
てしまう……よし）

一夏「わりい、俺は」

蒼也「すまん、一夏はシャルルと組むって決まっている」

一夏・シャルル「えっ？」

蒼也から発せられた言葉に声をあげる俺とシャルル

「そつか……なら御剣君!!」

「私と組んでよ!!」

「私とだよ!!」

一夏「お、おい蒼也……………」

蒼也「大丈夫だ一夏……………シャルルを頼む」

蒼也はそう言って保健室の空いていた窓から外に出ようとする

蒼也「今から1時間の間、学園内を逃げ回る俺を捕まえた奴と組んでやる!!俺はISを使わない、自分の力で全力で逃げてやる!!」

捕まらなかったら抽選で選ばれるのを願ってくれ!!」

そっいつて蒼也は窓から飛び出していった

「行くわよ!!御剣君は私の物なんだから!!」

「待ってて御剣君!!いま私が捕まえに行つてあげるから!!」

女子の軍団は保健室から颯爽と走り去つていった……

一夏 side out

シャルル side

先に部屋に戻っていると暫くして蒼也が戻ってきた

蒼也「ただいま~~~~」

シャルル「お、お帰り蒼也……で、どうなったの？」

蒼也「ん？逃げ切ったよ。いくらなんでも、女子に掴まる訳が無い
だろ」

シャルル「そ、そっか……………」

僕は簡単に言う蒼也の顔を見て安心していた

シャルル「えつと………なんで、蒼也はああ言ったの？」

蒼也「ああ………シャルルには、一夏をサポートしてもらいたかったんだ」

シャルル「サポート………あ」

蒼也「ああ、あいつはボーデヴィツヒさんと戦う事だけを考えてる。でも、あいつだけじゃ勝てないからな」

シャルル「なら、蒼也が組めば………」

蒼也「それだとシャルルに負担がかかるだろ？他の女子と組むことになるんだから」

シャルル「あつ………」

蒼也「あいつのサポート、頼んだぞシャルル」

シャルル「う、うん……そ、蒼也」

蒼也「なんだ？」

シャルル「えつと……助けてくれて、ありがとう」

蒼也「気にするな、一夏だって俺が言わなくても同じ事言ってただろっしな」

シャルル「そっか……」

蒼也「さて……俺は外に出てる」

蒼也はそう言って扉に向かう

シャルル「え？」

蒼也「その……俺がいると着替えにくいだろ？」

シャルル「そ、そんな事無いよ！！僕は気にしないから」

蒼也「俺が気にするんだよ……」

蒼也は頭に手を当ててため息を吐く

シャルル「だってみんなから怪しまれるだろうし……お互いに背を向けてればだ、大丈夫だよ！！」

蒼也「た、確かに・・・・・・・・じゃあ、俺も着替えるか」

シャルル「う、うん・・・・・・・・」

お互いに背を向けて着替え始める

シャルル（そ、蒼也・・・・・・・・僕を本当に助けてくれる・・・・・・・・
こんな僕を・・・・・・・・／／／）

僕は下着に手をかけたがその際に転んでしまう

シャルル「うわっ!？」

蒼也「ど、どうした!？・・・・・・・・え？」

シャルル「あ………」

蒼也が転んだ僕を見降ろしていた

今の僕の恰好は上半身が下着だけで、下半身は下着を脱ぎかけていた

シャルル「っ！？／／／／／きや

」

蒼也「やばっ！？」

僕は悲鳴を上げようとして、飲み込んだが蒼也は僕の口を塞ぐと僕に飛びかかっていた

蒼也「さ、騒ぐなシャルル。今騒いだら

」

むにゅ

シャルル「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気絶した蒼也をベッドに運んで、寝巻に着替え蒼也の顔をのぞいていた

シャルル「まったく蒼也は・・・・・・・・見かけによらず強引なんだから・・・・・・・・」

先程の事はシャルルの中では事故でも単なる偶然でも片付ける事が出来ずにいた

シャルル「ちゃ、ちゃんと言ってくれば、僕は別に・・・・・・・・」
／／／

そこまで言って僕は顔を真っ赤にしてしまう

シャルル（ああもうっ！！はやく寝ちゃおう！！）

蒼也から視線をはずし、部屋の照明を落とすが再び蒼也の顔の位置に視線を戻してしまう

シャルル（ぼ、僕・・・・・・・・なにやってるんだろっ・・・・・・・・／／）

暗い部屋の中、それが自分に大胆な事をさせている要因だと気づかず蒼也の顔を覗き込むシャルル

見つめている距離は5cm足らずであり、蒼也の寝息が顔にかかっていた

それだけでなく、彼の体温まで感じられて、シャルルの胸の高鳴りはいつそう強くなっていた

シャルル「・・・・・・・・」

その時、蒼也から言われた言葉が頭に蘇えってくる

蒼也『だっ たら此処にいる！』

初めて、そんな事を言われた

お母さんが亡くなってから、居場所がなくなって、血のつながりだけの父親とは氷の壁に閉ざされたような息苦しさしか感じられず、無為に日々を過ごしていた

ついには自分を必要とされる事すら求めなくなって、そんな灰色な生活に慣れてしまっていた

だから、父に日本に行けと命令されたときも何も感じてはいなかった
それなのに

シャルル（どうして、蒼也と蒼也の言葉はこんなに僕の心を揺り動かすんだろうね）

出会ってしまった、目の前の少年と

シャルル（好きに・・・・・・・・なちゃったんだね。蒼也の事が・・・・／／／）

自分の気持ちに気づくと、赤かった顔がさらに赤みを増していった

シャルル「おやすみ、蒼也・・・・・・・・」

彼の額にキスを落とし、シャルルは自分のベッドに入って眠りに落ちた

シャルル s i d e o u t

第8話 救われた心と好意（後書き）

ちなみにこの作品のシャルルには転生の方のフェイトさんのようになっ
てもらう予定ですww

いつ書けるかなあ・・・？

では

第9話 欲望の力（前書き）

ほとんど原作のコピペです

すみません、駄目作者で本当にすみません

第9話 欲望の力

一夏 side

6月の末、ここISS学園は普段と変わって学年別トーナメント一色に変わっていた

全生徒が雑務、会場の整理、来賓の誘導を行っていた

そして、終わり次第更衣室に移動し着替える

俺達は3人で広い更衣室を独占しながらモニターを見ていた

一夏「しかし、すごいなこりゃ・・・」

モニターに映った観客席から一度は見た事のある人物が多数発見できた

各国政府関係者、研究所員、企業エージェント

シャルルがいうにはそんな人々も来ているらしい

シャルル「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれの人が来ているからね。1年には関係ないみたいだけど、上位入賞者にはチェックが入るのはあると思うよ」

蒼也「ほー、やっぱり物知りだなシャルルは」

先程までISスーツに着替えていた蒼也が着替え終わったのか俺とシャルルの側に来ていた

蒼也「ま、一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になってるみたいだしな」

シャルル「そうだね」

一夏「まあな……つか、そんなに分かりやすかったか？」

蒼也・シャルル「ああ（うん）」

一夏「俺なんかより、鈴やセシリア達の方が辛いしな……」

先日の騒動によって負傷し、トーナメントに出れなくなった2人の事を考え左手を強く握りしめる

それをみたシャルルがそつとほぐした

シャルル「感情的にならないでね、彼女は現時点で1年最強だと思うから」

一夏「ああ、分かってる」

蒼也「お、対戦表が決まったみたいだな」

モニターが変わって対戦表が映される

一夏・シャルル「え

」

1年の部、Aブロック一回戦一組目

織斑一夏「1組」&シャルル・デュノア「1組」

VS

ラウラ・ボーデヴィツヒ「1組」&篠ノ之箒「1組」

モニターには、それがはつきりと表示されていた

蒼也「はて………のほとけ ほんね布仏本音さんとは、誰の事だ？」

蒼也は自分のペア相手について考えていた

ラウラ「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

一夏「そりゃあ何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

アリーナ内で対峙している俺とシャルル、ラウラと箒

そして試合開始まで5秒、4秒、3、2、1
開始！

一夏「おおおおっ！！」

試合開始と同時に瞬間加速イグニッション・ブーストを使ってラウラに接近する

この一撃が入れば戦況はこっちが優位になる！

ラウラ「ふん……」

対してラウラは冷静に右手を突きだした

来る

その時俺は、実際にラウラと戦った鈴とセシリアの言葉を思い出していた

一夏『A I C？なんだそれ？』

鈴『ラウラが使ってるシュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器よ。アクティブ・イナーシャル・キャンセラー、慣性停止能力。』

だからA I C』

一夏『ふーん』

セシリア『零落白夜なら斬り落とせるかもしれませんが、その前に一夏さんの腕本体を止められるでしょうし……』

一夏『ならどうすんだ？』

鈴『それを考えるのがあんたの役目でしょうが』

一夏『……ごもつとも』

結局、A I Cを確実に対処する方法は見つからなかった

だから後は

意外性で、攻める！！

一夏「くっ……………」

けれど、その程度は読んでいたのだろう。俺の身体は見えない腕に
掴まれたかのように、身動きが取れなくなっていた

ラウラ「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

一夏「そりゃどうも……………以心伝心で何よりだ」

ラウラ「ふっ」

敵ISにロックオンされています。警告

慌てんなよ、これは1対1の試合じゃないんだから
な？

シャルル「させないよ！」

シャルルが俺の頭を飛び越え、同時に六一口径アサルトカノン「ガ
ルム」による爆破弾の射撃を浴びせる

ラウラ「ちっ………！」

射撃によってずらされた砲弾は空を切り、そのままラウラは急後退
して間合いを取る

シャルル「逃がさない！」

シャルルは即座に飛びだし、銃身を正面に突き出して左手にアサル
トライフルを呼びだす

それはわずか1秒もかからずに形成を終了していた

シャルルが持つ得意技能「高速切替」ラビッド・スイッチ、戦闘と平行して呼び出せる、シャルルの器用さと判断力があってこそ光る代物だ

箒「私を忘れては困る」

しかし、ラウラへの追撃を打鉄うちがねを纏った箒が防ぐ

打鉄の特性といえる実態シールドがそれを現していた

シャルル「くっ」

一夏「シャルル！」

シャルルに斬りかかった箒を真横にした雪片二型で受け止め、シャルルはその一瞬の間にまた武装を変えていた

箒「なっ!?!」

俺の両脇から伸ばしたその手には六二口径連装ショットガン「レイ
ン・オブ・サタデイ」が握られていた

それを見た箒の顔が青ざめる

この至近距離なら、外さない

ラウラ「邪魔だ

」

箒「なっ！うわっ！？」

箒の身体が宙を舞い、入れ替わりにラウラが急接近してくる

箒はラウラの武装のワイヤーブレードの1つに足を掴まれ、飛ばさ
れたみたいだ

箒「くそっ！何をする……………！？」

体勢を直した箒が此方に向かおうとするがそれをシャルルが阻む

シャルル「相手が一夏じゃなくてごめんね」

箒「なっ・・・・・・・・馬鹿にするな！」

俺が雪片二型で4本のワイヤーブレードを防いでいる間、シャルルと箒の戦いが始まった

蒼也「あー・・・・・・・・布仏さんは何処にいるんだ？」

その頃蒼也は顔と名前が一致していないペアを探しまわっていた

？「もしもーし？そうー？」

蒼也「ん？のほほんさん？」

後ろから声をかけられ、振り向くとクラスメートののほほんさん「
一夏命名」が立っていた

のほほんさん「やっとみつけたよう、そうー」

蒼也「それは俺のあだ名か……？」

のほほんさんが一夏をおりむーと呼ぶようにそうーは俺の呼び名みたいだ

のほほんさん「さ、はやく作戦きめようよ」

蒼也「いや……俺は布仏本音さんとペアなんだが……」

のほほんさん「だから、私とだから言ってるんだよ」

蒼也「……は？」

のほほんさん「む、私が布仏本音だよ！」

蒼也「……すまん、本名知らなかった」

のほほんさん「あゝ！酷い……！」

・ アリーナの廊下の一角でそのやり取りが行われていたとか……

ラウラ「止めだ」

ラウラのワイヤーブレードを避けていた俺の目に映ったのは大型レールカノンの照準を終えたラウラの姿だった

一夏「くそっ……っ！」

回避が間に合わないと言った俺は右手の雪片二型で斬ろうとする

ぎしっ……

一夏「なっ!？」

残っていたワイヤーブレードの一本が右手に絡みついていたすぐに
テレそうでない状態だった

くそ……
一夏

シャルル「お待たせ一夏!!」

シャルルが持つ盾が砲弾を防ぎ、その間にワイヤーを切断してその
場から離脱する

一夏「助かったぜシャルル、箒は？」

シャルル「お休み中」

シャルルが向けた視線の先を見るとシールドエネルギーが0になった箒が悔しそうに膝まづいていた

一夏「流石だな」

シャルル「ありがとう」

これで2対1、ここからが本番だ！

そして俺は、俺の切り札を発動した

零落白夜、機動

一夏「これで決める！」

零落白夜を起動した俺は、ラウラへと直進する

ラウラ「触れれば一撃でシールドエネルギーを消滅させると聞いたが……当たらなければいいだけだ!!」

直後A I Cによる拘束が連続で襲いかかるが、急停止・転身・急加速でギリギリかわし続ける

ラウラ「ちよろちよると目障りな……!!」

さらにワイヤーブレードも攻撃に加わり、その攻勢が熾烈を極めるけど、俺は1人で戦っている訳じゃないんだよ！

シャルル「一夏！前方2時の方向に突破！」

一夏「分かった!!」

ワイヤーブレードをぐり抜け、ラウラを射程圏内に入れる

ラウラ「無駄だ、貴様の動きは全て読めている」

一夏「普通に斬りかければ、な。それなら」

ラウラ「なにっ!?!」

足元に向けていた雪片二型の切っ先を起こし、前へと持つてくる

そっ、斬撃が読まれるのであれば突撃で攻めればいい

ラウラ「無駄な事を……!」

その瞬間、俺の身体がA I Cによって完全に停止する

ラウラ「貴様のその腕にこだわる必要はない、ようは身体を止めればいいのだから」

一夏「・・・ああ、忘れたのか？俺達は
2人で戦っ
てるんだぜ？」

ラウラ「!？」

ラウラが慌てて視線を動かすが遅い、零距离まで接近していたシャルルが素早くショットガンの6連射を喰らわせていた

ラウラ「くっ・・・!!」

一夏（思った通りだ。A I Cは「停止させる対象物に意識を集中させてないと効果を維持できない」）

俺が考えている通り、俺の拘束は外れていた

シャルル「一夏！！」

一夏「おう！！」

雪片二型を再度構えなおし、ラウラに斬りかかる

しかし

シールドエネルギー、残量低下。零落白夜、維持不可能

一夏「なっ……………」

限界まで減ったシールドエネルギーの影響で零落白夜の展開が出来なくなった

ラウラ「ふっ、限界までシールドエネルギーを消耗してはもう戦えまい！！後一撃でもいければ私の勝ちだ！！」

シャルル「やらせないよ！！」

シャルルが俺も助けようと援護するが

ラウラ「邪魔だ！！」

ワイヤーブレードによってシャルルが飛ばされる

一夏「シャルル！！がはっ！？」

飛ばされたシャルルを見た隙を突かれ、ラウラの攻撃をもろに喰らい、床に沈む

ラウラ「はははっ！！私の勝ちだ！！！！」

自分の勝利を宣言するラウラ

しかし

シャルル「まだ・・・・・・・・終わってないよ！！」

ラウラ「なにっ！？」

シャルルが一瞬でラウラに接近し、それをみたラウラの表情が狼狽を見せる

ラウラ「い、瞬間加速・・・・・・・・！！？」

イグニッション・ブースト

シャルル「驚いたでしょ、今初めて使ったからね!!」

ラウラ「まさか……この戦いで覚えたと言っのか!？」

事前にみたデータに乗っていなかった事に驚くラウラ

だがすぐに冷静さをとりもどす

ラウラ「だが……わたしの停止結界の前には無力!」

右腕を突きだし、AICの発動体勢に入ったラウラ

ドンッ!!

ラウラ「なっ!？」

あらぬ方向から攻撃を受け、視線を巡らせる

そして、シャルルの捨てたアサルトライフルを構えた俺の姿を見つけた

ラウラ「この……死に損ないがあああ!!!!!!」

吼えるラウラだったがそれほど冷静を失ってはならず、目の前にいたシャルルにAICを集中させる

シャルル「これで、間合いには入れた」

ラウラ「それがどうした!! 第二世代の攻撃力では、kのシュヴァルツェア・レーゲンを落とす事など」

シャルル「うん、これさえなければね……!!」

シャルルは己が隠していた第二世代最強の武器を取り出していた
ずっと持っていた盾の中から

シャルル「この距離なら、外さない!!」

ラウラ「盾殺し（シールド・ピアース）・・・・・・!!」

ズガンっ!!!!

ラウラ「があっ!?!」

アリーナの壁まで吹き飛ばされ、追撃を行つたシャルルが3発ラウラに打ちこんだ

その攻撃でラウラの機体に紫電が走り、ISの強制解除の兆しが見え始める

そして、異変は起きた

一夏 side out

ラウラ（こんな・・・こんな所で負けるのか、私は・・・
！）

相手の力量を見誤った。それは確かに間違いようのないミスだ、し
かしそれでも

ラウラ（私は負けられない！負けるわけには、いかない・・・
！）

かつて捨てられた私を救ってくれた教官のようになる為にも……
・そして、その教官をあんなように変える存在にも……私
は、負けられない!!

ラウラ（力が……欲しい!!）

ドクンッ……

『願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？
より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など
空っぱな私など、何から何までくれてやる!!

だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を
私によこせ!!

D a m a g e L e v e l D .
M i n d C o n d i t i o n U p l i f t .
C e r t i f i c a t i o n C l e a r .

《 V a l k y r i e T r a c e S y s t e m 》 b o o
t .

蒼也「 ! ? 」

俺は突然感じた違和感に反応し、座っていた椅子から立ちあがった

本音「そうっ？どつしたの？」

俺達は更衣室で作戦を練っている途中だった

俺はそのまま更衣室から飛び出して一夏とシャルル側のピットに向かい始めた

蒼也（なんだ……この胸のざわめきは？あいつらに……
なにか起きたのか！？）

俺は全力でピットを目指した

第10話 解放たれる黒兎

一夏 side

ラウラ「ああああああっっっ！！！！！」

一夏・シャルル「！？」

突然ラウラが身が裂かんばかりの絶叫を発し、それと同時にシュヴアルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、傍にいたシャルルが吹き飛ばされる

シャルル「あぐっ………一体、何が

！？」

一夏「なっ！？」

俺とシャルルは目の前の状況に驚いていた

なぜなら、シュヴァルツェア・レーゲンの装甲がぐしゃりと溶けラウラを飲み込んでいたからだ

一夏「なんだよ……あれ」

ISは厳密に言えば変形をしない、いや出来ないと言った方が正しい

ISが形状を変える方法は「スタートアップ・フィッティング初期操縦者適応」と「フォーム・シフト形態移行」の2つなのだ

つまり、今日の前で起きている現象はありえないものである

シャルル「一夏、これは……」

一夏「分からない……」

シャルルと話している間にもそれは形を変形させていく

そして、黒い全身装甲フルスキンのISの形に留まって変形を終了した

その手に、1つの武器を持って

一夏「雪片」……………!」

千冬姉がかつて振るった刀、それがその手に収まっていた

酷似……………いや、まるで複写トレースしたかのようなレベルであった

俺は無意識のうちに雪片二型を握りしめていた

黒IS「……………!」

刹那、黒いISが俺の懷に飛び込んでくる

俺はとつさに雪片二型を構える

ガキンッ!!

一夏「!!」

雪片二型が弾かれ、黒いISはそのまま上段の構えに入る

一夏（これは　　まずい!?）

俺は白式に「後方退避」の緊急回避命令を送る

そして、黒いISの斬撃が襲いかかった

ガキイイイインツ!!!

蒼也「・・・・・・・・・・」

割り込んできた蒼也が俺に斬撃が当たる直前、ビームサーベルを展開して刀を止めていた

蒼也「っ…………一夏、大丈夫か!？」

一夏「あ、ああ。大丈夫だ」

蒼也「そ…………うかつ!！」

黒IS「!」

蒼也がサーベルを振り払い、黒いISは一端距離を取る

シャルル「そ、蒼也!？どうして此処に!？」

蒼也「いやな胸騒ぎがしてな……………急いで来てみればこんな事になってたんだ」

箒「一夏!」

そこに打鉄装備の箒が来る

一夏「蒼也……あいつは、俺が止める」

蒼也・箒「なっ……一夏!」

そして俺は雪片二型をを構えて黒ISに突っ込んだ

一夏 side out

蒼也 s i d e

一夏が黒いISに飛び込んでいく

第「馬鹿者！！白式のエネルギーがほぼ無い状態で……下がれ、一夏！！」

しかし、第の言葉に耳を傾けず一夏は黒いISと斬り合い始める

蒼也「くっ……俺が一夏を止める！」

シャルル「待つて蒼也！！こんな事態、学園の先生方がすぐに収集してくれるよ！」

非常事態発令！トーナメント全試合は中止！状況をレベルDと認定、鎮圧の為教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難する事！繰り返す」

蒼也「それでも……せめて一夏を止める！このままだと、いつ白式が解除されるか分からない！」

シャルル「あ、蒼也！！」

シャルルの言葉を振りきって、俺は斬り合っている一夏の元に飛んだ

黒IS「！」

すると、黒いISは標的を俺に変更して雪片で斬りかかってくる

一夏「無視するなああああ……！！！」

その隙に一夏が雪片二型で斬りかかる

黒いIS「

！」

一夏「がはっ!?!」

蒼也「一夏!?!」

一夏が反応出来ずに、回し蹴りを喰らい幕達のすぐ側に落とされる
それが最後だったのか、白式が解除されISスーツの姿に戻る一夏

黒IS「

!?!」

蒼也「ちいっ!?!」

クスイフィアスを放ち、一端距離を開かせる

蒼也（先生方が来るまで………持たせてみせる!!）

蒼也 s i d e o u t

一夏 s i d e

一夏「それが………どうしたああああ!!」

白式が解除されてなお、一夏は黒いISに殴りかかるつとする

それを、箒がISから降りた状態で後ろから羽交い絞めにして止める

一夏「離せよ箒!! あいつは
」

箒「いい加減にしろ!!」

バシーン!

箒が一夏の頬を思いっきりひっぱたく

それで少し冷静になったのか、息を整える一夏

箒「説明しろ!なんだというのだ!!」

一夏「あいつ、あれは千冬姉のデータだ。千冬姉だけのものなんだよ！―」

箒「……………まったく、お前は」

一夏の言葉を聞いて、ため息を吐く箒

一夏「それだけじゃねえよ、あんな、わけわかんねえ力に振り回されているラウラも気にいらねえ。ISとラウラ、どっちも一発いれねえと気が済まねえ」

箒「理由は分かったが、どうするっていうのだ？白式のエネルギーは無いに等しいんだぞ？」

一夏「ああ……………」

箒「それに、蒼也が時間を稼いでくれている。その間に学園の先生方が鎮圧してくれる。お前がやる必要は無い」

一夏「ちがうぜ、箒。これは俺がやらなきゃいけないんじゃない・
・・・」俺がやりたいからやる」んだよ」

箒「しかし・・・・」

シャルル「エネルギーがないなら、他から持ってくればいいんだよ」

一夏「シャルル・・・・」

今まで黙っていたシャルルが、会話に入り込んできた

シャルル「僕のリヴァイブなら、コア・バイパスでエネルギーを移せるよ」

一夏「本当か!?!」

シャルル「ただし、約束して。絶対に負けないって」

一夏「ああ、負けたら男じゃねえよ」

シャルル「じゃあ、負けたら一夏には明日から女子の制服で通ってもらおうか」

一夏「うつ……いいぜ？ 負けないからな」

シャルル「ふふっ」

シャルルのがリヴァイブから伸ばしたケーブルをガントレット箆手状態の白式に繋ぐ

シャルル「リヴァイブのコア・バイパスを解放、エネルギーの流失

を許可

」

数秒間、その状態が続くとシャルルの装甲が光に包まれ消えた

シャルル「これで大丈夫。リヴァイブのエネルギーを全部白式に渡したよ」

ISスーツのシャルルが俺を見て言う

その視線はすぐに戦闘中の蒼也に向けられる

シャルル「蒼也……………」

一夏「……………白式を一極限定状態で再起動する」

俺の言葉に反応して、白式が右手の雪片二型と装甲だけで展開する

箒「一夏……死ぬな、絶対に死ぬな!!」

一夏「信じるよ」

箒「あつ……」

俺の言葉に、言葉をとどめる箒

一夏「俺を信じるよ、箒。ただ、信じて待って入れくればいい。必ず、勝って帰ってくる」

そして俺は、雪片二型を両手で構え

一夏「零落白夜　　発動！」

俺の切り札を、発動した

それは今までとは違った

今までのように、強大なエネルギーを開放するだけだった零落白夜の刃ではなく、細かく鋭い刃となっていた

一夏 s i d e o u t

蒼也 s i d e

黒いISと斬り合い続けていた蒼也だったが、時間が経つにつれ、不思議と相手の斬撃を全て受け流せるようになっていた

蒼也（なんだ………？見える、こいつの………剣の動きが）

斬撃が振り下ろされても、最小限の回避でよけ、確実に攻撃をいれていく蒼也

蒼也（分かる………こいつの動きが、隙が………）

蒼也は気づいていなかった、フリーダムを展開している画面に表示されている言葉に

ワンオフ
唯一使用の特殊才能、アビリティ
SEED発動

一夏「蒼也、後は俺がやる」

蒼也「……………分かった」

俺はサーベルを閉まって、黒いISから離れる

一夏「……………」

零落白夜を発動した一夏に黒いISが反応する

そして、一夏に斬撃を振るった

一夏「はああああ!!」

それを避けた一夏が、上から雪片Ⅱ型を一閃し、黒いISを斬った

斬られた部分からボーデヴィツヒさんが出てきて、一夏が受け止める

蒼也「やったな、……………夏……………」

それを見た俺は、地面に足をつけて意識を手放した

蒼也 s i d e o u t

ラウラ s i d e

ラウラ」っ、あ……………」

千冬「気がついたか」

目を覚ますと、教官の姿が映った

ラウラ「此処は……私は」

千冬「全身に無理な負担がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。
暫くは動けないだろう」

ラウラ「何が……起きたのですか？」

私は状況を把握するために、教官に問う

千冬「一応、重要案件であるうえに機密事項なのだが……」

教官はしばし沈黙して、言葉を紡ぎ始めた

千冬「VTシステムは知っているな？」

ラウラ「ヴァルキリー……トレースシステム？」

千冬「そくだ、IS条約によって全ての国家・組織・企業においても研究・開発・使用全てが禁止されている……それが、お前のISに積まれていた」

ラウラ「……」

千冬「操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして操縦者の意思……いや、願望か。それらが揃うと、発動するようになっていた」

ラウラ「私が……望んだからですね」

沈黙が流れ、ラウラは言葉が出なくなってしまう

千冬「ラウラ・ボーデヴィッヒ」

ラウラ「は、はい」

千冬「お前は、誰だ？」

ラウラ「わ、私は……………」

自分がラウラだと言おうとしても、言葉が出てこない

千冬「誰でもないなら、これからラウラ・ボーデヴィッヒになればいい。3年間はこの学園に在籍するのだからな」

ラウラ「あ……………」

話す事が終わったのか、座っていた椅子から立ち上がる千冬

千冬「ああ、それから……………お前は私になれないぞ」

ラウラ「え……………」

自分があの時、本当に望んでいた事を見透かされている事に驚く
ウラ

千冬「あいつの姉は、こう見えて心労が絶えないのさ」

そう言って部屋から千冬が立ち去ると、ラウラは笑いだした

ラウラ「ふ、ふふ……ははっ」

ラウラは自身が一夏に助けられた時の出来ごとを思い出していた

千冬「1つ忠告しておくぞ。あいつに会う事があれば、心は強く持て。あれは未熟者のくせにどうしてか、妙に女を刺激する。油断していると、惚れてしまうぞ?」

そんな風と言う教官の顔は、酷く嬉しそうだった

それに何処かモヤモヤしてくる

ラウラ「教官も惚れているのですか？」

千冬「姉が弟に惚れるものが、馬鹿め」

ニヤリとした顔で言われて、ますます落ち着かなくなる

これは私の記憶、そして……その後が私にとって、出会いだった

一夏『強さつーのは心の在処。自分がどうありたいかを常に思う事じゃないか、と俺は思う』

……そう、なのか？

一夏『やりたいようにやんなきゃ、いろいろと人生で損をするぞ？』

ではお前は……？お前は何故強い？

一夏『強くねえよ俺は、全く強くない……』

その言葉に私はポカンとしてしまう

一夏『けれど、もし俺が強いつて言つのなら、それは
強いのだ』
心が、

一夏『それに、強くなったら、やってみたい事があるんだよ』

やってみたい事……？

一夏『誰かを守ってみたい。自分の総てを使って、ただ誰かの為に戦ってみたい』

それは、まるで……あの人のようだ

一夏『そうだな。だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ』

そう言われて、私は気づいた

こいつの前では、私はただの15歳なのだと。ただの「女」なのだと

織斑、一夏

彼の言葉に、私はときめいてしまった

ああ、これは確かに

惚れてしまいそうだ

ラウラ side out

第11話 本当の名前

一夏 side

《トーナメントは事故により中止になりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての1回戦は行います。場所と日時の変更は

》

食堂のテレビを誰かが消し、俺は食べていた海鮮塩ラーメンをまた食べ始めた

ちなみに、シャルルと同じテーブルで食べている

一夏「シャルルの予想通りだな」

シャルル「そうだね。あ、一夏。七味取って」

一夏「はいよ」

俺は俺の近くに置いてあった七味をシャルルに手渡す

シャルル「ありがとう」

当事者な俺達がこんな呑気で夕飯を食べていても良いのかって？

勘弁してくれ、さっきまで教師陣から事情徴収を受けていたんだから

おかげさまで食堂終了ギリギリに到着し、今こうして食べているわけだ

一夏「蒼也は平気なのか？」

俺が零落白夜あの黒いISを斬ってラウラを助けたと同時に、それまで交戦していた蒼也がISを解除して倒れたのだ

シャルル「うん、ただの疲労らしいよ。今は部屋で寝てるだろうし・

「……………」

そう言うシャルルの顔は何処か安心しているようだった

一夏「そうか……………」
「ごちそうさま」

俺は食器を片づけようとして席から立つ

一夏「ん……………」
「？」

そこで、俺達が食べ終えるのを待っていたはずの女子達が目に映った
さっきまで今か今かと心待ちにしていたはずなのに今は酷く落胆しているようだった

「……………優勝……………チャンス……………消え……………」

「交際……………無効……………」

「・・・うわあああああんっ!!」

そこに立っていた女子達数十人はバタバタと泣きながら走り去っていった

シャルル「どうしたんだろう・・・?」

シャルルも食べ終えたのか、食器を持って俺の横に立っていた

一夏「さあ・・・ん、簞?」

女子達が走り去った後に、呆然と立ちつくしている簞の姿があった

俺は食器を置いてから話しかける

一夏「箒、そう言えば先月の約束だけど……」

箒「あ、ああ」

一夏「付き合っても、いいぞ？」

箒「ほ、本当か！？本当に、本当に、本当なのだな！？」

一夏「何回確認すればいいんだよ……」

一夏「あ、ああ」

箒「な、何故だ！？り、理由を聞こうではないか……」

一夏「幼馴染の頼みだから。付き合っさ」

箒「そ、そうか………」

そう聞いた箒の顔は何処か嬉しそうだった

一夏「買い物くらい」

箒「……………」

そして、一瞬で表情がこわばる
どうしたんだ？

箒「……………だろうと……………」

一夏「？」

第「そんな事だろうと思ったわっ!！」

どげしっ!！」

一夏「ぐはあっ!？」

第の正拳づを喰らい、床に沈む俺

シャルル「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思う時があるよね」

一夏「ど、どついう意味だ……それは？」

シャルル「さあね？僕は蒼也の分を持っていかないといけないから、また明日」

シャルルはそう言って、前もって頼んでいた蒼也の夕食をトレイに乗せて部屋に戻っていった

一夏 s i d e o u t

蒼也 s i d e

蒼也「ん・・・・・・・・・・此処は、俺の部屋・・・・・・・・・・か？」

気が付くと、俺は自分のベッドの上にいた

どうやら、誰かが運んでくれたらしい

蒼也「・・・・・・・・・・」

俺は、あの時感じていた感覚を思い出そうとした

あの、敵の動き、隙が何もかも見えている

あの時の感覚を

シャルル「あ、蒼也？目が覚めたんだ」

蒼也「シャルル・・・・・・・・」

シャルルがトレイに食事を持って部屋に入ってきた

シャルル「はい、蒼也の夕食。持って来たよ」

蒼也「あ、ああ。ありがとな」

俺はベッドから立って、テーブルに置かれた夕食を食べ始める

シャルル「・・・・・・・・・・」

その間、何故かシャルルが俺をじっと見つめていた

何故かは分からないが・・・・・・・・

真耶「御剣君？デュノア君？ちょっといいですかー？」

シャルル「あ、はい」

外から山田先生の声が聞こえ、部屋に入っていていいとシャルルが答える

真耶「えつとですねー。ついに今日から、大浴場が使用出来る事になったんです!!」

蒼也「え？そうなんですか？」

真耶「はい！えつと、御剣君はお食事中みたいですし、デュノア君と織斑君は先に入ってきたらどうですか？」

シャルル「え、えつと……………」

シャルルが困ったように俺を見る

そうだよな、シャルルは実は女だし…………

シャルル「えつと…………僕は蒼也と一緒に行くので、先に一夏に行っていて伝えてくれませんか？」

真耶「そうですか？なら、伝えておきますね」

そう言つて部屋から出て行き、隣の一夏に伝えに行つた山田先生であつた

蒼也「シャルル……どうする？」

シャルル「えつと……行かないと、不味いよね？」

蒼也「ああ……」

風呂場に行くまでに打開策が浮かび上がる

そんな淡い希望を抱く俺であつた……

真耶「あ、来ましたね！それじゃあどうぞ！」

蒼也「ど、どうも………」

結局、何も浮かばずに風呂場に来てしまった

真耶「ごゆっくり」

幾分テンションが高い山田先生に見送られて、脱衣場に入る俺とシ

ヤルル

蒼也・シャルル「・・・・・・・・・・・・・・・・」

周りを見る限り、既に一夏は部屋に戻ったようである

男物の衣類が何処にも置いてない為、そう判断出来た

蒼也「えーと、シャルル？」

シャルル「は、はいっ!？」

敬語で反応するシャルル、まあ・・・・・・・・こんな状況だしなあ・・・
・
・

蒼也「シャルルは今日疲れただろうし・・・・・・・・風呂入ってこいよ。
俺は適当に時間つぶして、部屋に戻ってシャワー浴びるからさ」

シャルル「え．．．でも、蒼也は時間稼ぎした時の疲労も残ってるよ？僕の事は気にしないでいいから、ね？」

蒼也「そ、そうだが．．．．．」

シャルル「それに．．．一夏が言っただけ、日本の男子って風呂に入る方が好きなんだよね？」

蒼也「まあ、好きと言われれば好きだが．．．．．いいのか？」

シャルル「うん」

蒼也「じゃあ、入るか．．．．．この恩は、いつか返すよ」

シャルル「あ、うん。行ってらっしゃい／＼／＼／＼／」

シャルルは顔を赤くして答え、俺はシャルルの視界に入らない所で服を脱いだ

蒼也「じゃ、じゃあ入ってくる」

シャルル「う、うん。ごゆっくり」

そして、扉を開けて大浴場に入る

蒼也「……………広っ!？」

あまりの広さに大声で叫ぶ

俺の声が風呂に響く

蒼也「とにかく、身体を洗うか……………」

そして俺は全身を洗い終えて湯船に浸かった

蒼也「あゝ・・・・・・・・・・久しぶりの風呂だゝ・・・・・・・・・・」

何とも言えない、この感覚

やはり日本人は風呂でないと駄目みたいだ

蒼也（やべえ・・・・・・・・・・気持ち良すぎて眠りそうだ・・・・・・・・・・）

カラカラカラカラ・・・・・・・・・・

蒼也（ん？気のせいか・・・・・・・・・・？今、脱衣所の扉が開くような音がしたんだが・・・・・・・・・・）

ぴたぴたぴた

濡れたタイルの上を足が歩く音が聞こえる

蒼也（なんだ……まあ、いいや……）

そんな音も今の蒼也には自然の音にしか聞こえていなかった

しかし

シャルル「お、お邪魔します……／＼」

蒼也「ああ……どうぞどうぞ……！！？」

半ば湯船に沈みかけていた顔を飛び上がらせると、湯気の間にはスポーツタオルを身体に当てていたシャルルの姿があった

しかし、シャルルの肌はタオルが濡れているため、うっすらと透け

て見えていた

蒼也「なっ・・・・・・・・」

シャルル「・・・・・・・・あんまり、見ないで。蒼也のえっち・・・・・・・・」
／／／／／

蒼也「す、すまん!!」

少なからず、タオル越しとはいえ身体を見てしまったため即座に謝る蒼也

蒼也「ど、どうした？確かに俺は入浴を勧めたが、それは俺が入らない場合であってだな・・・」

シャルル「僕が、一緒だと・・・・・・・・イヤ・・・・・・・・？」

蒼也「いや、けしてそう言う訳ではないが……………」

俺も健全な男子高校生、普通の15歳だ

ISが動かせようと、そこは変わらない

つまり、人並みに異性には興味がある

だからこそ、この状況に困っている

シャルル「えつと、ね……………やっぱり、お風呂に入ってみようかなと思って……………め、迷惑なら上がるよ?」

蒼也「い、いやいや。上がるなら俺が上がる。シャルルはゆっくり堪能すればいい……………」

シャルル「ま、待って!!」

シャルルの声に呼び止められ、動作を止める

シャルル「そ、その……話が、あるんだ。大事な事だから、蒼也にも、聞いてほしい……」

蒼也「わ、分かった……」

大事な事と言われれば、聞かないわけにもいかない

俺は、シャルルの味方なんだから

シャルル「その……前にも行った事、なんだけど」

蒼也「……学園に、残るって話か？」

シャルル「う、うん。僕ね……此処にしようと思う。僕はまだ、此処だっと思える居場所を見つけられてないし、それに……」

蒼也「そ、それに……………」

シャルル「……………／／／／／」

俺の背中に背を預けるようにシャルルが動き、そのまま沈黙が続く

ぴちゃん

シャルル「きゃあっ!?!」

蒼也「ど、どうした!?!」

シャルルの可愛い叫び声に、驚く俺

シャルル「す、水滴が落ちてきて……ビックリしただけ」

蒼也「そ、そうか……」

シャルル「……」

蒼也「……」

そして、また沈黙が流れる

ちやぷ……

蒼也「シャルル？」

湯船の水が動く音が聞こえ、俺は反射的に発生源の方へ顔を動かそうとする

シャルル「こ、こっち見ちゃ駄目！！あっち向いてて！！／＼／」

蒼也「す、すまん！／＼／」

僅かだがシャルルの身体が見えてしまい、すぐに言われた通り視線を元に戻す

蒼也（な、何がしたいんだシャルルは！？俺は男だぞ！？駄目だ・
・・頭がくらくらしてきた・・・・・）

しかし、そんなぼーとした意識は次の瞬間、吹き飛んだ

ぴとっ

シャルルの手が俺の背中に触れる

蒼也「シャ、シャル
」

そのまま、手は俺を抱きしめた

シャルルの華奢な身体が俺の背中に密着して、俺の鼓動は今までにない位バクバク言い始める

シャルル「蒼也が、此処にいろって言うてくれたから。そんな蒼也がいるから、僕は此処にいたいと思えるんだよ」

蒼也「そ、そうか……」

俺は、自分に何かできないと思って言ったことだったが、それがシャルルの助けになったのなら、嬉しいと思う

シャルル「それに、ね。もう1つ決めたんだ」

蒼也「もう1つ……?」

シャルル「そう。僕のあり方。蒼也が教えてくれたんだよ?」

蒼也「そ、そうか……」

シャルル「うん、それでね……僕の事は、2人っきりの時はシャルロットって呼んでくれる?」

蒼也「シャルロット……それが」

シャルル「うん、お母さんがくれた、僕の本当の名前」

蒼也「分かった　シャルロット」

シャルロット「ん」

嬉しそうにシャルル

いや、シャルロットが返事をした

蒼也「と、ところでだな……い、いつまでもこの状態でいられると、正直色々とまずい事態が起こりうるんだが……／＼／＼」

今の俺の背中にはシャルロットの柔らかな膨らみが密着している

そう、直に胸が当たっているのだ

シャルロット「あ、ああっ、うんっ！ぼ、僕、先に身体と髪洗っちゃうね！」

シャルロットが自覚して、湯船から上がる

シャルロット「こ、こつち覗いちや駄目だよ……?」

蒼也「あ、ああ……分かつてる」

シャルロット「……覗いても、いいのに……」

最後に何か呟いていたが、俺には聞こえなかった

その後、お互いに別々に着替え終えて、部屋に戻った

次の日、朝のHRが始まる前

俺は一夏と一緒に教室に来た

シャルロットは『先に行つてて』と言われたからである

真耶「お、おはよう………」

山田先生がぐったりした表情で教室に入ってきた

な、何があつたんだ!?

真耶「今日ですね……みなさんに転校生を紹介します。あ、でも……みなさん既に知っているというか……既に紹介は済んでいるというか………」

山田先生の説明にクラス全員?マークを浮かべている

真耶「じゃあ、入って下さい」

「失礼します」

．．．．．今の、声．．．．．まさか

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めて宜しくお願いします」

シャルロットが女子の制服を着て、丁寧にお辞儀をしていた

「え？デュノア君って女．．．．．？」

「って、御剣君、同室だから知らないってことは」

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場を使ったって！」

あー・・・・・・・・死んだかな、これ？

俺がそう思った瞬間、教室のドアが蹴飛ばされた

鈴「一夏あああああつ！！！」

そこに立っていたのは鈴だった

その背後には、昇竜が見える

鈴「死ね！！！！！」

ISアーマーが展開し、それと同時に両肩の衝撃砲がフルパワーで撃たれた

ズドドドドオンッ！！

鈴「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

怒りのあまり肩で息をしている鈴

それは威嚇している猫のようにも見えた

一夏「・・・・・・・・ラウラ!？」

一夏の前にはシュヴァルツェア・レーゲンを纏ったラウラがいた

恐らく、A I Cで衝撃砲を消したのだろう

一夏「助かったぜ、サンキュー・・・・・・・・むぐっ!？」

一夏の方を向いたラウラに礼を言った一夏だったが、その唇が塞がった

ラウラの唇によって

ラウラ「お、お前は私の嫁にする！！決定事項だ！！異論は認めん！！」

一夏「・・・・・・・・・・は？」

鈴「一夏・・・・・・・・・・死んで詫びろおおおお！！！！」

一夏「なああああああ！！？」

再び衝撃砲の標的にされる一夏

当たらないように逃げようとするが、箒が真剣を持って塞いでいた

セシリア「蒼也さん・・・・・・・・？詳しくOHNASHIをせてもらいますわよ？」

セシリア、それはお前が使うものではないと思うんだが……

そのHRは、頃合いを見て織斑先生が鎮圧させた

一夏という犠牲を払って……

蒼也 s i d e o u t

第11話 本当の名前（後書き）

ついにシャルルが女の子だと公表!!

次回からは臨海学校編!!

冒頭には「アレ」がありますよ!!

さらに……

ではでは!

第12話 朝からドキドキ ハプニング？（前書き）

今回は3巻の冒頭です

アニメでは9話の開始5分程までかな？

原作を呼んでいる方なら原作とは違うものがありますのでお楽しみに

ただ、今回は短いです

すみません、ではどうぞ

第12話 朝からドキドキ ハプニング？

シャルロット side

シャルロット「ごめんね、手伝ってもらっちゃって」

蒼也「気にするな」

放課後の廊下、赤い夕陽が差し込む中を蒼也とシャルロットが歩いていた

2人の手には、数日後の臨海学校についてのプリントがある

シャルロット「でも、良かったの？今日は一夏達と買い物に行く予定だったんでしょ？」

僕は自分に付き合ってもらっている蒼也に少し申し訳ない気分になる

蒼也「いいんだよ……大体、シャルロットがいらないんなら行ってもしょうがないしな」

シャルロット「え？」

蒼也「まあ……その、プリントの手伝いでも好きな相手と一緒にいた方が良いつてことだよ／＼」

そう言った蒼也の頬は少し赤みを帯びていた

シャルロット「蒼也……／＼」

蒼也「シャルロット……／＼」

2人しかいない廊下で、お互いの瞳には相手だけが映っている

そして、夕日の色に染まっている廊下で、二人の影は徐々に重なって

シャルロット s i d e o u t

一夏 s i d e

一夏「ん・・・・・・・・」

窓から朝日が差し、目を覚まし始める一夏

一夏（もう少し．．．．もう少し．．．．）

このまどろみの延長、それこそが至福の時である

ふに。

一夏（．．．．．？）

ふにふに。

一夏（はて、この感触はなんだ？）

すべすべしていて、柔らかい感触

それが布団の中にあつた

ふにふにゆっ。

「ん・・・・・・・・」

待てい。今、確かに俺の物ではない声が聞こえたぞ

俺は目を開けて、布団をめくる

一夏「ラ、ラ、ラウラ!？」

そこにいたのはドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒだった

しかも、寝間着なども着ず全裸で俺の真横で寝ているのだ

ラウラ「ん・・・・・・・・なんだ・・・・・・・・？もう朝か・・・・・・・・？」

一夏「ば、馬鹿！隠せ！！」

目を擦りながら身体を起こすラウラ

色々に見える為、身体を隠すように促す

ラウラ「夫婦とは包み隠さぬものだ聞いたぞ……」

一夏「俺は夫婦になつた覚えは無いぞ！？」

ラウラ「日本では、気にいった者の事を「俺の嫁」と言つらしいが……」

一夏「お前に間違つた知識を吹き込んでいるのは誰なんだ……？」

俺がラウラに指差しながら手を伸ばすと腕を取られて身動きが取れなくなってしまう

痛えっ！？痛いって！？

ラウラ「お前はもう少し寝技の訓練をすべきだな。ど、どうしてもと言うのなら、私が相手になってやらないでもないが……／＼」

一夏「何故そこで顔を赤くする！？つてか、蒼也が起きるだろうが！？」

シャルル、いやシャルロットの性別がばれて以来、俺と蒼也は同室になった

つまり、窓側のベッドでは蒼也が今もすやすやと寝ているはずなのだ

ラウラ「安心しろ、私は別に気にしない。お前と蒼也になら身体を見せても問題は無い」

一夏「はあ!？」

ラウラ「蒼也も私を助けようとしたのだろう? お前ほどでもないが、蒼也を気にしているのは確かだ」

一夏「そ、そうか………って、それでもこれは駄目だろ!?!
いいから離せ!」

ラウラ「なに………私だけがこんな事しているわけではないぞ
?」

一夏「……………はい?」

ラウラの視線が隣のベッドに向けられていたので、俺もそちらを向く
そのベッドにかかっている布団からは、2人分の足が出ていた

一夏 side out

蒼也 s i d e

蒼也（ん・・・・・・・・なにか騒がしいな・・・・・・・・）

半覚醒の頭に一夏と誰かの言い合いが聞こえる

しかし、それを聞いていても蒼也の頭は目覚めようとしていない

蒼也（まあ、いいや・・・・・・・・もう少し、寝よ・・・・・・・・）

蒼也は寝返りをしようとするが

「ん……………」

蒼也（……………？）

完全に動かせず、しかも腕によって抱きしめられているのに気付く
蒼也

蒼也（何だ……………？）

その存在を確かめる為に目を開ける蒼也

シャルロット「すう……………ん……………」

蒼也「……………!?!」

目に入っ たのは可愛い寝顔のシャルロットであつた

しかも、顔と顔の合間は5cmあるかないかだつた

シャルロット「う……………ん……………そ、うやあ……………」

蒼也「……………//」

どこか甘い感じがする寝言で、しかも自分の名前を呼ばれて恥ずかしくなる蒼也

しかも、シャルロットの両腕が自分の身体を抱きしめている為、柔らかいシャルロットの胸が普通に当たっていた

第「チエストオオオオオオ!!!!」

一夏「ぎゃあああああああ!?!」

ラウラ「人の嫁に何をする!?!」

箒「知らん!!こいつをまずは成敗する!!」

一夏「や、止める箒!!」

どたどたどたどた……

どうやら、隣の一夏にも何かあったようで、部屋から飛び出て行ったようだ

セシリア「蒼也さん?もう、朝ですわよ?」

コンコンと閉められたドアが叩かれ、冷や汗を流し始める蒼也

蒼也（まずい………シャルロットがいるこの状況を見られたら・
……）

シャルロットを隠すために、身体を揺すりはじめる蒼也

シャルロット「………ん、蒼也………？」

蒼也「起きろシャルロット、それで少し隠れ
」

シャルロットは目を開けると同時に、俺の上に覆いかぶさった

蒼也「シャ、シャルロット？早く隠れないと………」

シャルロット「蒼也………」

しかし、蒼也の言葉が聞こえていないのか顔を近づけるシャルロット

10cm、5cm、3cm

顔と顔の距離が縮まっていく・・・

・・・

セシリア「蒼也さん、入りますわよ？そろそろ起きないと、朝食の時間がなくな・・・り・・・」

部屋のドアを開け、中に入ってきたセシリアの顔が2人の姿を確認すると同時にこわばっていく

セシリア「な、何しているんですの・・・？蒼也さん、シャルロットさん・・・？」

蒼也「いや・・・これはだな・・・」

その間にもシャルロットは顔を近づけている

もう、1cmあるかないかまで近づいていた

蒼也「ええい！シャルロット、起きろ！！」

蒼也が頭にチョップしようとしたが、シャルロットの身体は急に離れて、床に落ちる

セシリア「そ・う・や・さ・ん？少し、OHANASHIが必要のようですわね……」

金色の髪が逆立ち、セシリアの後ろにまがましいオーラと修羅が見えている蒼也

シャルロット「……あれ？蒼也にセシリア？どうしたの？」

ようやく目を覚ましたのかシャルロットが状況を問う

セシリア「シャルロットさん？あなたも後でOHANASHIですわよ？」

シャルロット「え？」

その後、寮の一室に男子と女子の悲鳴が1つづつ響いたとか・・・

蒼也 side out

第13話 愛称、それは関係進展のフラグ？

蒼也 side

一夏「あゝ…………朝から酷い目にあつた…………」

蒼也「俺もだ…………」

現在、モノレールに乗って目的地の駅前近くのショッピングモールに向かっている俺達

ちなみに、メンバーは

第「ふん、大体貴様が朝からあんな事をしているからだ！」

一夏「だから第！！あれはラウラが勝手に」

第「うるさいっ！男ともあろうものがいいわけするな！！」

怒り心頭で外を眺めるように顔をそむける箒

シャルロット「えへへ／＼／＼」

蒼也「・・・・・・・・・・はあ」

一夏と箒が座っている席の前では、シャルロットが俺の腕に幸せそうに抱きついてにやけていた

蒼也「シャルロットがあんな事するからセシリアが怒ったんだぞ！？」

シャルロット「うう・・・・・・・・だつて」

俺がきつい口調でシャルロットに言つと、にやけがおから一転膨れ

顔になるシャルロット

蒼也「はあ……大体、なんであんな事を」

シャルロット「……あ、そうだ蒼也。どうして僕を誘ってくれたの？一夏に箒もいるし……」

疑問だった事を俺に聞いてくるシャルロット

蒼也「ああ。もうすぐ臨海学校だろ？俺も一夏も水着持って無かつたし、シャルロットも無いって前に言ってたから一緒にと思ってな」

シャルロット「そ、そつか……」

一夏「箒も持っていないって言ってたから、ついでは呼んだんだよ」

箒「・・・・・・・・ふんっ！」

ガッンッ！

一夏「ぐえっ！？」

箒の正拳を喰らい床に沈む一夏

シャルロット「唐変木だね、一夏・・・・・・・・」

蒼也「箒も鈴もラウラも浮かばれないな・・・・・・・・」

そして、目的地の駅に着いた

シャルロット「~~~~」

シャルロットは降りるなり蒼也の手を握った

箒「・・・・・・・・」

箒は俺とシャルロットを見て、次に一夏を見る

一夏「?」

箒「・・・・・・・・な、何でもない!」

またそう言っで一夏から視線をそむける箒だった

蒼也 side out

「
．
．
．
．
．
．
．
．
」

「
．
．
．
．
．
．
．
．
」

蒼也とシャルロット、一夏と箒

その2組を物陰から見つめる姿があつた

鈴「ねえ．．．．．」

セシリア「なんですの．．．．．」

鈴とセシリアであつた

2人の表情からは黒いものがうかがえる

鈴「あれって、デート……よね」

セシリア「そうですね……」

鈴「そつかあ……あたしの見間違ひでもなく、白昼夢でもなく、
やっぱりそつか。よし殺す
――！」

握りしめた鈴の右拳「ぐんし」には既にISアーマーが展開しており、準戦闘
モードになっていた

ラウラ「ほう、楽しそうだな」

鈴「!？」

声が聞こえ、後ろを向くとラウラが立っていた

ラウラ「そう警戒するな。今の所、お前たちに危害を加えるつもりはない」

セシリア「し、信じられるのですか!」

ラウラ「そうか………」

ラウラはそう言つと、エレベーターで降りていた一夏達を追いかけてようとする

鈴「ちょ、ちょっと待ちなさいよ!―何処に行くつもりよ!―」

ラウラ「決まっている、私も交ざる」

セシリア「ま、待って下さい！！未知数の敵と戦うには、まず情報収集が先決ですわ！！その上で、関係がどのようなか見極めないと！！」

鈴「うんうん！」

セシリアの言葉にうなづく鈴

ラウラ「なるほど……一理あるな」

セシリア・鈴・ラウラ「……………」

そして、3人は決めた

彼らの尾行を開始すると

蒼也 side

蒼也「なあ、シャルロット」

シャルロット「ん、なにかな？」

ショッピングモールを歩いている途中、気になった事があったので
問いかける

蒼也「どうして、皆に女だってばらしたんだ？ああ言ってたから、
まだ男子のフリをしようと思ったんだが……」

シャルロット「えっと、ね……蒼也に、ちゃんと女の子として……見てもらいたかったんだ／＼」

蒼也「そ、そうか……でも俺は、シャルロットの事はちゃんと女として見てるぞ？」

シャルロット「そ、そう……／＼」

俺の言葉に頬を赤くするシャルロット

蒼也「あ、そうだ。もう皆シャルロットが女子だって知ってる訳だし……何か別の呼び方を考えるか」

シャルロット「え、いいの？」

蒼也「ああ。うーん……俺とシャルロットの間だけの呼び名・

「……シャルなんてどうだ？呼びやすいし、親しみやすいし」

シャルロット「う、うん！……いいよ、すごくいい！……」

蒼也「そ、そうか……」

シャルロットの喜びように少し押される蒼也

蒼也「………あ」

ふと、目に入った物を見る蒼也

シャル「蒼也？」

蒼也「悪い、先に行って水着選んでくれ。俺もすぐに行く」

シャル「?分かった」

そう言つて、シャルはすぐそこだった水着店に入つていった

一夏「どうした、蒼也？」

箒「これは・・・・・・・・・・」

後ろが一夏と箒に声をかけられる

蒼也「ああ、ちょっと買つていこうと思つてな」

蒼也はそう言つて店の中に入つていった

蒼也 side out

第13話 愛称、それは関係進展のフラグ？（後書き）

次話はで2人っきりのあれ！！

皆さん、お楽しみに！！

ではでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0414r/>

IS（インフィニット・ストラトス）～空を愛する蒼剣～

2011年5月20日15時41分発行